

史実ではない歴史と存在しなかった人物。しかし、虚数と虚数の積が負の実数となる如く、この物語からも否定的な真実が立ち現われてくるかもしれない。

目次

侍女に悦虐を刻む七つの拷虐	- 2 -
始りの章	- 2 -
拷虐の一：磔架輓曳	- 25 -
拷虐の二：人定拷問	- 79 -
拷虐の三：色責馬車	- 176 -
拷虐の四：浄化儀式	- 197 -
拷虐の五：重鎖輓曳	- 269 -
拷虐の六：魔女証明	- 283 -
拷虐の七：鞭打輪姦	- 301 -
処刑執行直後の救出	- 318 -
異国で競売される王女と侍女	- 328 -
終章	- 328 -
後書	- 363 -

この物語はフィクションです。登場する人物・組織・地名・歴史などは実在しません。

侍女に悦虐を刻む七つの拷虐

始りの章

時はキリスト暦でいうなら第二千年紀を三分の一ほども過ぎ、十字軍が過去の歴史となった頃。大砲や銃のような火器は遙か東の国に出現していたが、この地に伝わるにはさらに半世紀を要する。

所は地中海の東端、二つの宗教が競合する地域。大陸を水平線ぎりぎりに望見しながら東に向かう船団があった。

この時代としては大型に属する二隻の軍船に護られた三隻の中型商船。ともに最新鋭の二檣船で船首斜檣も備えている。大きさが違うのみで、ずんぐりした船型は酷似していた。ただし軍船のほうには、無風に備えた櫂座の開口部が舷側に見えている。

船首右手から吹きつける風に髪覆を片手で押さえて来し方を振り返っていたアクメリン・リョナルデは、船員の怒声に一切の感傷を消し飛ばされた。

「左舷七時の方角！ 船影発見！ 三角帆！
海賊だあああああ！」

アクメリンは左舷を振り返って目を凝らした。水平線と雲以外は、何も見えない。

雁行する三隻の両側を固めていた二隻の軍船が、急転舵して北へ向かう。

「侍女殿、危険です。船室へお戻りください」

甲板に飛び出してきた船員の一人に声を掛けられて。それでも、アクメリンは軍船の向かう先を見詰めた。

いた。二本の帆柱と三角形の帆。帆の形から、せいぜい二十人乗りくらいの短艇ではないかと、アクメリンは推測した。大型船の帆は四角形に決まっている。

「侍女殿。お早く」

今度は間近から声を掛けられて、相手が船長の次くらいに偉い甲板長だと知った。

「見たところ、小船のようですけれど。そんなに大騒ぎする必要があるのでしょうか？」

弓で帆を破って操船の自由を奪い、相手の船に切り込んで制圧する。船と船の戦いも頭数が物を言う。二十人程度では軍船どころか商船でも鎧袖一触だろうに。

「ありゃあ、アルイエットだ。小船どころか、こっちの軍船といい勝負です。しかも、相手

は三隻ですぜ」

甲板長が左舷の三方を指差した。確かに、そこには三隻の船がこちらへ舳先を向けていた。アクメリンがそれを認めたのは一瞬のこと。

「御無礼はお赦してください」

甲板長に肩を押されて、アクメリンは船倉への階段を降りるしかなかった。

狭い通路を船尾へ向かって。宮殿とは違って、狭い船内。姫君の部屋は、そのまま筆頭侍女の部屋でもあった。それでも、きちんと礼法を守って入室する。

「エクスタ様、海賊が襲ってきたようです」

「叫び声は、ここまで聞こえていました。まさか、この船団がメスマン王国への親善使節と知っての襲撃ではないでしょうね」

フィッシュク準王国第二王女エクスターシャ・コモニレルは、身の安全よりも国の安泰を懸念している口ぶりだった。

基督教国が異教徒の国と同盟を結ぶなど、まして大量の貢物と寵姫候補まで差し出すとなれば、世に知られては大騒動になる。防諜には細心の注意を払っていたはずなのだ。

「それは考えても詮の無いことですけれど、海賊は恐れるに足りぬかと思います」

横風を受けて突っ走っている船団に対して、向かい風に逆らって走らねばならない海賊船が追いつけるわけがない。しかも、軍船が迎撃に向かっている。アクメリンは、生嚙りの知識とたった今見聞いた事柄とを交えて、三つ年下のエクスターシャ姫を安心させようとした。

しかし、気休めは長く続かなかった。

「やられたぞお！ 二隻とも炎上している！」
「くそっ！ なんだって、あんなに速く切り上がってくるんだ！？」

「武器を持て。いや、水桶の用意だ！」

甲板で飛び交う怒号。

船が右に大きく傾いた。

「ええっ……？！ あれを！」

アクメリンが船窓の彼方を指差した。水平線のわずか手前で一隻の軍船が紅蓮の炎に包まれていた。帆が燃えている。その横に別の船影が現われて、真っ直ぐこちらへ近づいて来るのが、遠目にも分かった。ひよろ長い帆柱に先細りの帆を張っている。

船はさらに旋回して、元の針路とは正反対へと進み始めた——のだろう。あるいは風向きを考慮して、百八十度の針路変更ではなかったかもしれないが、そんなことまではアク

メリンには分からない。分かっているのは、信じられないほどの速さで海賊船が迫って来ているという事実だけだった。

海賊船は、こちらの針路をふさぐような位置関係を保って、地上でなら二百歩くらいの距離まで接近した。船首に立った男が、拡声喇叭をこちらへ向けて何か怒鳴っている。

「あれは……？！」

エクスターシャ姫の声は質問ではなく、絶望だった。

海賊船の甲板に巨大な弩が据えられて、^{やじり}鑢から炎が燃え上がっている。それが二基。さっきの軍船も、これで帆を焼かれたのだ。

「総帆、下ろせえ！」

船長の怒鳴り声。たちまちに、行き足が鈍る。

この船が海賊の餌食となる事態は避けられない。それからどうなるのだろうと、アクメリンは咄嗟に考えた。

この船には目ぼしい財宝を積んでいない。いや、エクスターシャ姫そのものが掛け替えのない財宝だ。フィシヨンク準王国にしろ興入れ先のメスマン首長国にしろ、莫大な身代金を払って王女を取り返そうとするだろう。けれど、侍女は？

身代金が上乗せされれば、三人ともに解放されるかもしれない。けれど、それまでに純潔は踏みにじられているだろう。

偽物侍女のイレッテとミアーナは、そんな運命をも平然と受け容れるでしょうと、アクメリンは苦々しく思う。いいえ、平然とではなく嬉々としてかもしれない。

メスマンでは、後宮の女は、たとえ正妃でさえ主人の奴隷。まして侍女など、人間として扱われるかも疑わしい——基督教国では、そのように信じられている。だから、ズコバック家もオッケイン家も、愛娘がエクスターシャ姫のお供に選ばれるや、同じ年頃の奴隷娘や娼婦を養女に迎えて即席の行儀作法を学ばせて——この旅の途中ですり替えている。

しかし、アクメリンだけは本物だった。ひとつには、リョナルデ男爵家には、奴隷娘ひとりを買うだけの資力すらなかった。ふたつには——こちらのほうが大きな理由だが、彼女はエクスターシャ王女が幼少の頃からの侍女、いや幼馴染だった。姫君から懇願されては、断われればフィシヨンク宮廷内に居場所がなくなる。

アクメリンは内心では、エクスターシャを軽蔑している。先の王妃が薨去されるや、喪

の明けぬうちから正妃に直り、みずからが産んだ第二王女の養育すらなおざりにした挙げ句、下級貴族と駆け落ちまでしてのけた前王妃のメソビア。その娘が王家の一員であるとは、片腹痛い。第一王女のモジョリンと張り合うさえおろかというに、兄の気を惹くつもりか女だてらに軍学の書物にまで手を伸ばす。ふしだらにしてお転婆。救いようがない。

祖母が二代前の国王と又従妹である私のほうが、よほど王家にふさわしい——などという内心はおくびにも出さず、三つ年上の忠実な侍女として仕えてきて、ようやく、エクスターシャの盛衰がそのまま我が身の栄達につながるところまで至った。

奴隷娘を買い入れて愛娘の身代わりに仕立てることも叶わぬとなれば、四女の持参金など準備できようはずもない。家を助けるために裕福な商人に降嫁など真っ平だし、それ以前に男爵では箔が薄い。第二王女の腹心を座を勝ち取れば、いずれ姫殿下がしかるべき王家に嫁ぐ暁には侍女長として随伴して、その国で伯爵の跡取り息子あたりに見初められるか、その前に国内でも縁談が引く手数多^{あまた}となるだろう。

そのはずだったのに。主人は異教徒の首長

の第四夫人だけに（実質的には）売られてゆくなど、我が運命も窮まれり。

そういった想念を、一瞬の稲妻の如く消し去って。アクメリンは能う限り平静な声で、エクスターシャに呼び掛けた。

「エクスタ様。服をお脱ぎください」

およそ、この場にふさわしくない言葉を掛けられて戸惑うエクスターシャにアクメリンがかぶせる。

「海賊どもの狙いは姫様かもしれません。私が身代わりになります」

フィションクは、隣接するリャンクシー王国とタンコシタン大公国とに脅かされている。海賊がこれらの国の手先であれば、エクスターシャ姫は即座に殺される――はずもない。しかし、そんな政治の駆け引きにまで、この危急時に世間知らずの王女にしても男爵令嬢にしても、思い至るはずもなからう。

だから。この申し出は、主人に忠実な侍女なればこそ。我が身に危難を引き受けるのだ。王女は大切な人質として扱われ、侍女は荒くれ男どもの餌食にされる――などとは、夢にも思っていなかった。と、アクメリンは後々の言い訳まで頭に浮かべる。

もちろん。それもこれも、この場で咄嗟に

思い立った悪巧みではない。長い道中。敵国に襲われたらどうしよう、山賊や海賊に拐われたらこうしよう——と、あれこれ懸念し妄想もしていた筋書のひとつを、一世一代の大博打に賭けたのだった。

アクメリンは王女に考える暇を与えまいと、率先して衣装を脱ぎ捨て下着姿となった。

「姫様も、お早く」

エクスターシャ姫も、ようやく決心したと見え、あたふたと衣装を脱いだ。さいわいに旅路とて、脱ぐのに手間暇の掛かる拵えではない。しかも、質実剛健というより隣国との戦費の捻出が身なりにも及んでいるので、下着は王女も侍女も大差ない。

二人は交換した衣装を身に着け——王族を象徴する額冠や首飾は宝石箱に納めてこの部屋に置いてあるから、エクスターシャの指輪をアクメリンが身に着ければ、偽物の王女と侍女とが出来上がる。

二人が同じ場所に居てはすぐにもすり替わりが露見しかねないと案じたことにして、アクメリンはエクスターシャを、二人の即席侍女にあてがわれている船室に身を隠させた。

王女様の御入来に驚いているイレッテとミァーナに、アクメリンは自分が王女の身代わ

りになることを告げた。

「これからは、わらわが王女エクスターシャです。相手はむくつけき海賊ども。そなたたちには以前の仕事もしてもらわねばならないでしょうが、なるたけ丁重に扱ってくれるよう、わらわが取り成します。そして、わらわが身代金と引き換えに解放される暁には、必ずそなたたちも一緒です」

二人は、一も二もなく頷いた。ろくに言葉も交わしたことの無い世間知らずの御姫様よりは、これまでにその有能ぶりを間近に見ている三つ年上の姉貴分のほうが、よほど頼り甲斐がある。

エクスターシャが扮するアクメリンも、二人に向かって殊勝に言葉を掛ける。

「皆に迷惑をかけることになるやも知れぬが、わらわを……」

「アクメリン」

アクメリンが王女としての威厳をつくろって、たしなめる。

「あなたはアクメリンなのですよ。言葉遣いにも気をつけなさい。『わらわ』などと言っていては疑われますよ」

アクメリンに化けているあいだは、そのように振る舞わなければならないのだと、エク

スターシャも理解したようだった。

註記: ややこしいので、特に必要のない限り、
本名で表記する。

「はい、気をつけます——姫様」

エクスターシャは裳裾を掴まんで、貴顕に対する淑女の礼を執った。

アクメリンは軽く頷いたが——この姫君は面白い『ごっこ遊びでも』しているつもりなのではないかと危ぶんだ。

甲板に通じる昇降口の開く音がした。速やかに居室へ戻って、海賊どもと応対しなければならない。

居室へ戻ったのと、数人の荒々しい足音が階段を下りて来るのとは、ほとんど同時だった。

「この船に乗っているのは、フィッシュンク使節団の誰だ。クレジワルド伯爵か、ヤックナン男爵か、それともエクスターシャ王女か？」

やはり機密が漏れている。万一の遭難に備えて、三人が別々の船に乗っていることさえ知っているようだ。

ばあんと、扉が乱暴に蹴り開けられて、二人の海賊が押し入ってきた。

「フィッシュンク準王国第二王女、エクスターシャ・コモニレルです。わらわに何用ですか」

機先を制して声を張るアクメリン。

「へっへえ。いらせられやしたぜ。けっこうとう臺が立ってやがるな」

もっとも気にしているところをいきなり突かれた。侍女長であれば、仕えている姫君よりも年上なのは当然だが——貴族の娘が十七八となれば、早ければ結婚しているし、遅くても婚約者がいる。ところが自分は、その年齢を過ぎても殿方との口づけすら知らない。熱心に仕えるあまりに嫁き遅れたと好意的に見てくれるのは身内だけだろう。

しかし、腹を立てたおかげで肝が据わった。二人のうち、格上と見られる男を睨みつけてやる。

男は、素肌に分厚い腹帯を巻いて長剣をぶっ違いに差した上に、まだ夏の名残も漂う季節だというのに外套を羽織っている。頭髮と揉み上げと顎髭とが渾然一体となった（体格まで）熊のような風貌だった。その男が、言葉遣いのわりには優し気な声で——拉致誘拐を告げる。

「すまねえが、俺たちと一緒に来てもらうぜ。なに、手荒なことはしねえ。宮廷作法にゃ疎いが、丁重に扱って差し上げる」

やはり、エクスターシャ姫の身代金が目当

てかと、アクメリンはほっとした。いきなり危害を加えられる惧れはなさそうだった。

「ところで、侍女とか小間使いとかは別の部屋にいるのか？」

「そのような者はいません」

「おいおい、仮にもお姫様とあろう者が……」

「異教徒の国で奴隷に墮とされると分かっているのに、なんぞ侍女など伴いましょう。わらわ一人です」

アクメリンは、三人が潜む船室にまで届けとばかりに声を張った。二人の偽物侍女が姫君に反感を募らせてくれれば、それだけ自分を信頼してくれるだろうという、したたかな思惑があった。

「そうかい。ま、姫様には、俺らの船へお越し願ひましょう」

海賊の一人が、アクメリンの腕をつかんだ。アクメリンは気丈に腕を払いのけた。

「触れないでください。来いというのであれば、どこへなりと行きます」

王女を演じていると、自然に高飛車な物腰になる。それはけっしてエクスターシャの真似をしているのではなく、アクメリンの裡に潜んでいた気性であった——ということに、当人は気づいていない。

通路には、さらに三人の海賊がたむろしていた。アクメリンを船室から引き出した男が手を振ると、乱暴な家探しが始まった。

「おやめなさい。あなた方の狙いはわらわなのでしょう。余の者には手を出さないでください……」

つぎつぎと扉を蹴り開けている海賊どもをたしなめるといふよりも、やはりイレッテとミアーナに聞かせるために声を張った。

「いいから、甲板へ出ろよ」

後ろから、無礼にも尻を押されて、抗議する間もなく階段を上がらされた。

甲板には、船長を始めとする乗組員が集められていた。その前を素通りして、アクメリンは船縁^{ふなべり}へ押しやられた。下を見ると、十丁の櫂で漕ぐ短艇が浮かんでいる。

「姫さんには、あれで俺らの船へ来ていただきますしょう」

短艇は海面すれすれに浮かんでいる。甲板から海面までの高さは六歩長。見るだけで、膝頭から股間へ冷たい戦慄が奔る。

「ちょいと失礼しますぜ」

熊のような男はいちおうは断わっておいて、アクメリンを後ろからひょいと抱き上げた。

「きゃっ……」

上げかけた悲鳴を、アクメリンは呑んだ。こんな場面でエクスターシャがどう振る舞うかなど、想像もつかないけれど。王女としては毅然としているべきだろう。

「何をする。わらわに触れるでない。下ろしなさい」

熊男は王女様の抗議を聞き流して——片手で王女を肩に担いだまま、舷側に垂らされている網を伝って、簡単に短艇へ降りた。

「野郎ども、姫様に手も魔羅も出すんじゃないぞ」

短艇の乗組員たちが、どっと笑う。

アクメリンは、魔羅などという単語は初めて耳にしたが、どうせろくでもない意味だろうと見当をつけた。

短艇には十人の漕ぎ手が五段の座席というには粗末すぎる渡板に二人ずつ並んで腰掛けて、艫には舵を握った艇長が左舷に座している。アクメリンは、艇長の向かい側に席を与えられた。短艇は狭いし揺れが激しい。与えられた板の座面におとなしく座っているしかない。

アクメリンを担ぎ下ろした熊男は鹵獲した商船に引き返し、短艇はフィションク準王国第二王女という財宝を積んで船を離れた。向

かうは、遠く離れて停船している、使節団正使の座船――に接舷している海賊船だろう。

できればクレジワルド伯爵とは顔を合わせないまま、海賊船に連れ込んでほしいと、アクメリンは内心で願った。すり替わりを海賊に気取られないようにしながら伯爵に経緯を説明するのは難しい。

むくつけき海賊の中にぽつんと咲いた色艶やかな花にも似て。亜麻色の長い髪を潮風に飛ばれながら、アクメリンはエクスターシャが捕らわれている船から遠ざかって行った。これが永遠の訣れ――ではなく、^{みつ}三月と経たぬうちに再び相まみえ、それぞれに淫惨にして悦虐の道を歩むことになるのだが、それは最終章に譲る。今は、これからアクメリンが辿るひと月余の拷虐をつぶさに見ていこう。

海賊船の横っ腹に着けた短艇から、アクメリンは文字通りに吊り上げられた。腋の下に太い綱を回されて、万一にもすっぽ抜けないう、下ろした手を前で縛られて腰に結び付けられ、海賊船から張り出した梃子柱の桁で甲板まで引き上げられたのだ。それが、アクメリンが海賊どもから受けた唯一の手荒な仕打ちだった。

前編を読んでおられる読者は、エクスターシャが海賊どもから受けた仕打ちとはあまりに隔絶していることに驚嘆されるであろう。海賊どもにとって、王女は同じ重さの金とまでは言わぬにしても銀よりは値打のある宝物であり、侍女などは牝穴に過ぎないからである。実際には牝穴としてだけ扱われたのではないことも、読者が御存知の通りである。話をアクメリン——王女の身分を篡奪した侍女に戻そう。

海賊船でアクメリンを迎えたのは、服装こそ熊男にそっくりだが、三十歳そこそこに見える優男だった。然るべき場所で、どこそこの子爵様と紹介されれば、それを疑いもしなかっただろう。こんな男が、荒くれ者を束ねているとは、むしろそちらのほうが疑わしい。

男は、ヴァギナン号船長のミズン・モシュタルと名乗った。ヴァギナン号だけでなく、襲撃に参加したパイオーツ号とオシリーヌ号、さらにはアルイエットに属する全船舶を掌握している。

「というわけで、提督と呼んでくれりゃあ嬉しいぜ。ミズン様なら、もっと嬉しいがな」

この男なら誑かすも籠絡するも容易い——と思ったのは、アクメリンが男というものを

まったく知らないからではあったろう。

海賊船に貴賓室などあろうはずもない。捕まえた牝など船倉の片隅に押し込めるか、騒ぎ立てるようなら裸に引ん剥いて帆柱に縛り付けておく——などという作法を知る筈もないアクメリンは、当座の居室として船長室をあてがわれたことに、とくに感謝もしなかった。海賊船は南の大陸からの季節風に乗って、陽の高いうちに海賊の本拠地に入港したので、アクメリンが船長と二人きりになって貞操の危機に怯える事態も出来しなかった。

渡板に怯えるアクメリンは、今度は船長に抱きかかえられて海賊船を下りて——そのまま、町外れの民家に軟禁された。とは、表現が過激である。民家に招待されて、滞在を求められたというべきか。外を出歩く自由は与えられなかったが、海賊や守備兵など六百名と聞かされた荒くれどもがうろつく街へなど行きたいとは思わない。民家に住むのは老夫婦とひとり息子。息子は警備隊に勤めているが、外ではいざ知らず、両親の前では善良な青年だった。そうでなくても、実質的な街の支配者である提督の客人に狼藉を働く懸念など皆無だった。

おのれの身の安全が保障されると——エク

スターシャ王女が気懸かりになってくる。王女がどのように扱われようと、アクメリンの知ったことではない。いや、イレッテやミアーナがかつて従事していた職業のほうがエクスターシャにはふさわしいとさえ思っているくらいだ。もちろん、そのように扱われれば、エクスターシャは陵辱から逃れようとして悪あがきをするに決まっている。我こそは王女なりと言い出さないとも限らない。

「わらわの侍女たちは、どのように遇されているのでしょうか」

一家の主婦である老婆に尋ねてみた。

「この街にゃ、身寄りのない女が二三十人も……住まわされとるけど」

老婆が言い淀んだ言葉は『強制的に』だろうと、アクメリンは推測した。女たちは、ひとつの寄宿舍で共同生活を営んでいるという。

下級貴族の娘であれば、寄宿舍という言葉は娼館と置き換えるくらいには、世故に長けている。

「今さらに侍女たちと会えば、かえって不安を掻き立てるやも知れませぬ。されど、いささは励ましてやりたいと思います。そう、この指輪を与えてやれば、わらわの存在を身近に感じて、心を強く持ってくれるでしょう」

指輪にはコモニレル家の紋章が刻まれている。すなわち、王族の証し。これをエクスターシャに返してやれば、いざというときには身の証しを立てられる——と、安心するだろう。しかし、フィションクから遠く離れた海賊どもが、紋章を知っているとも思えない。指輪は、紙で作った短剣のような物でしかないのだ。

アクメリンは、さらに周到な悪意を巡らす。近所に住む少年に指輪を託した後に、これは一家の主である老人に頼んで、甘ちゃんの（と、アクメリンは見くびっている）モシュタル提督を呼び寄せた。

「わらわの侍女長を務めているアクメリンが心配です」

悲しげに目を伏せる芝居で提督の気を惹く。「あの者は、わずかですが王家の血を引いています。そして、わらわは——提督は御存知ないかもしれませぬが、王妃の身でありながら下級貴族と駆け落ちをするような、淫奔きわまりない女の娘。わらわなどより、よほど王女にふさわしいと吹聴しては、誰彼の眉をひそめさせております」

それはまさに、アクメリンが秘かに思っているそのままだっただけに、真実味を帯びて

いた。

「常日頃から心の落ち着かぬ彼女を励ますために、わらわは先ほど、王族の証したる指輪を隣家の者に託しました。ですが、かえって良からぬ結果を招くのではないかと——それで、提督をお呼び立てしたのです」

「分かった。指輪は取り上げる必要もなかろう。そういうことがあったと、俺が覚えておくでしょう」

——アクメリンの策が功を奏して、エクスターシャ王女の名乗りがまったく相手にされず、その夜のうちに純潔を散らされ、あまつさえすべての穴を繰り返して犯されたことは、前編で述べた。

アクメリンはその詳細まで知ることはなかったが、街の中心で夜更けまで松明の明りが灯り、笑い声や歓声が何度も聞こえてきたことから、相当な乱痴気騒ぎがあったことだけは、その渦中にエクスターシャが巻き込まれたに違いないことだけは推測がついた。

その翌日に、不意にエクスターシャの訪問を受けたアクメリンは狼狽したが。エクスターシャの申し出は、まさにアクメリンが思い描いていた構図を王女自身が補強してくれるものだった。

「御無事で何よりです、姫様」

二人きりとはいえ、隣の部屋には老夫婦も居れば、エクスターシャに付き添って来た提督までも聞き耳を立てているかもしれない。エクスターシャの物腰は、侍女の主人に対するそれだった。

「私は無念なことに、メスマン首長国の後宮に入る資格を昨夜に失いましてございます。ですが、姫様は純潔でいらっしゃいます。何とぞ、御無事に後宮に入らせ賜い、首長の寵愛をお受けくださいますように。フィシヨンクとメスマンの掛橋となってくださいませ」

たとえ自分がほんとうに王女であったとしても、これほどに国家に尽くすことなど出来るだろうかと――アクメリンはエクスターシャを（幾分は）見直した。

「彼の国では偶像崇拝を禁じるあまりに、肖像画さえ禁忌であるのは、姫様も御存知のはず。言葉伝ての容姿など、如何様にも言い抜けられましょう。金髪と亜麻色、髪の色の違いも、通辞の勉強不足で押し通せるかと」

アクメリンが考えてもいなかった先のことまで、エクスターシャは顧慮している。

「姫……アクメリン殿は、それで良いのですか？」

壁の向こうの耳を懸念してではなく、囁くような声に自然となるアクメリン。

「あなたが申し出たことなれど、決めたのは私です」

これは、身替りのことを言っている。エクスターシャにも、盗み聞きへの配慮をする心の余裕がなくなっているのだろう。

「迎えの者には、私からも口添えいたします。もしも姫様だけが解き放たれて、私が海賊どもの慰み物として留め置かれるようなことになれば……そのときは、クレジワルド殿に書簡を認めます」

真性の王女から臣下の伯爵に、侍女を王女と――メスマンの首長に偽れという書簡。

後宮の女はすべて首長の奴隷ではあるが、貧乏貴族の四女よりは、よほど恵まれた生涯を送れるだろう。ほんのわずかだけ、エクスターシャへの憐憫を感じないこともなかったけれど。淫奔な女の娘には、海賊どもの慰み者こそがふさわしいと、心の動きを封じる。

「分かりました。及ばずながら、能う限り王女としての務めを果たします。なにとぞ、よろしくお願い致します……ぞえ」

どうにか王女らしく締め括ったアクメリン。

こうして二人は、アクメリンとは違ってエ

クスターシャは成り行きとはいえ、海賊ばかりか強大な異教徒国まで欺く陰謀に手を染めたのだった。

拷虐の一：磔架輓曳

退屈な日々が過ぎていった。あれ以来、エクスターシャは二度と訪れなかったが、提督は週に一度くらいは来て、三人の侍女の動静を――きわめて婉曲的に教えてくれた。

エクスターシャは、最初の宴の夜にひと悶着を起こしたけれど、すぐに男たちと『仲直り』をして、二度と騒ぎを起こすことはなかった。指輪も、提督を通じて返してくれている。もはや不要と思ったのだろう。イレッテとミアーナは、積極的に男たちと『親睦』を深め、身代金が払われようともアルイエットに定住するつもりになりかけている。提督とても、船を襲い財宝を奪い王女たちを誘拐した海賊の仲間どころか頭目なのだから、不都合なことは言わないだろうとは、アクメリンにも分かっている。経済的な困窮の意味も多少は知り、庶民の事情もいくらかは見聞し、三年だけでも年上であれば、エクスターシャ

よりはよほど、物事の裏を見抜くこともできると己惚れているアクメリンだが、この先に大きな陥穽は無いと樂觀していた。

肝心の解放については。正使のクレジワルド伯爵はメスマンへ向けて解き放ち、副使のヤックナン男爵はフィションクへ向かわせたと、提督から聞いた。フィションクから身代金が届くとしても、それにはまだ日数を要するだろう。即座に身代金を用立てて最短経路を辿れるなら、往復でせいぜい二週間だが、リャンクシーとタンコシタンの勢力圏を迂回すると、ひと月は要する。身代金の額によっては、大急ぎで臨時税を徴収する必要もあるだろう。一方、メスマンの首都であるアリエザラムまでは、アルイエットから海路で三日と陸路を二日。たとえ王女と侍女を合わせて四人分の金塊でも、メスマンにとってはたわわな林檎の木から一つ二つをもぎ取るくらいの負担ではなかろうか。それがまだ届かない。所詮はメスマンにとって、王女はいささか珍しい奴隷としか見られていないということだろうか。

——捕らわれて三週間も過ぎた頃。

フィションクからでもメスマンからでもない、迎えの一団がアルイエットを訪れた。襲った

というべきであろうか。

「フィッシュク準王国の第二王女、エクスターシャ・コモニレル。フィッシュク準国王の背教容疑について問い質したき事あるによって、証人としてデチカンへの出頭を命じる」

きらびやかな法服を纏った痩せぎすの男は、みずからを枢機卿キャゴッテ・ゼメキンスと名乗った上で、そのように告げた。背後には部下とおぼしき二人の修道僧、さらに後ろには十人の護衛兵。それだけでも物々し過ぎるのに、枢機卿の隣には、提督に次ぐアルイエットの顔役ともいうべき熊男——パイオーツ号船長のヒゲン・モテワッコまでが、長剣こそ帯びていないが、きちんと襯衣を着た上に、洋上で見たときと同じ外套を羽織って、苦虫を噛み潰して呑み込んだような顔で並んでいる。

迂闊だったと、アクメリンはほぞを噛んだ。海賊にまで同盟の秘密が漏れているのであれば、西方社会の隅々にまで教会を配している教皇庁の耳に届かぬはずもなかろう。さっさとメスマンへ入っていればともかく、東西の接点ともいうべき港町で二十日の余も足止めされていれば、デチカンの追求が及ばないはずもないのだった。

どのように処すべきかと、アクメリンは焦燥と不安の中で考えを巡らす。

おとなしく連行されるか。

自分はエクスターシャではなく侍女のアクメリンだと暴露するか。しかし、そうすると。エクスターシャは連れ去られ、身代金を持参した迎いの使者は、あわてて一行を追うだろう。そのとき、^{はしため}端女ごときは足手まといになるだけ。仮にエクスターシャを奪い返して、改めてメスマンへ送り届けるためにアルイエットに引き返して来るとしても。それには日数が掛かる。

その間、侍女に過ぎないアクメリンを、海賊どもは放っておかないに決まっている。いや、自分たちを謀った小娘は存分に懲らしめてやれ、となるのではなかろうか。他の三人と違って、海賊たちの気性を文字通り肌身には感じていないアクメリンには、神の使徒よりは荒くれ男どものほうが、よほど怖かった。

それに。枢機卿は「証人として」と明言した。糾弾されるのはフィションク準王国、ひいては準国王である。王女は、準国王の背教に巻き込まれた犠牲者——とは、アクメリンの身勝手な理屈に過ぎないのだが。

この場で騒ぎを起こすよりは、自分がエク

スターシャとして連行されるのが良いだろうと、アクメリンは決断した。エクスターシャ姫は、幼馴染でもある私を、決して見捨てないだろう。提督と談判して、私を取り戻す手を打ってくれるのではなかろうか。そのためにも、ここは穏便に事を運んだほうが良策というものだろう。

アクメリンの理屈は、すべての物事が自分に都合良く運ぶだろうという希望に基づいていたし、それにしても、あちこちに論理の破綻があるのだが――決断を先延ばしにしたいという優柔不断の典型ではあった。アクメリンにしてみれば、王女とすり替わった、その一大決心が人生のすべてを賭けた決断であり、続けざまの二度目など彼女の器量をはるかに超えていたのも確かではあった。

アクメリンは、身の回りの品々をまとめるわずかな時間を猶予されて後、枢機卿とともに迎えの馬車に乗り込んだ。

こうして――異教徒への生贄にされた王女とその地位を篡奪した侍女の、淫虐と拷虐への門が開かれ、犠牲者がくぐった後は、後戻り叶わぬよう、固く閉ざされたのだった。

アクメリンが馬車に乗っていたのは一

時間にも満たなかった。港町アルイエットの
ある半島と大陸とをつなぐ細い道を通り過ぎ、
関門を固める守備隊も林の向こうに隠れた草
原で、三台の馬車と二十騎の護衛兵が停止—
—する前に、アクメリンは馬車から蹴り落と
された。

「いつまで姫君を気取っておる。こcona背教
者めが。売女にふさわしい姿にしてくれるわ」

草原に倒れ伏して、あまりの豹変に怯える
しか知らないアクメリンを、後ろの馬車から
降りた二人の修道僧が引き起こし、羽交い締
めにして衣服を脱がせに掛かる。

もしも彼女が真正の、そして海賊どもの手
荒い洗礼を受けて後のエクスターシャであつ
たなら。お坊様も所詮は男なのね——と、衣
服を破られないようにみずからも身体を動か
して協力するか、いっそ手を振り払って衣服
を脱ぎ捨てたか。それとも、海賊に捕らわれ
る前の姫君であつたなら、たとえ羽交い締め
にされていようとも、眼前の無礼者に平手打
ちくらいは与えていただろう。

しかしアクメリンは、いたずらに身をもが
くばかりで、かえって男の狂暴を引き出して
しまい——下着に至るまで頭陀襤褸に引き裂
かれた。さらには、靴も靴下も奪われて、文

字通り一糸纏わぬ姿にされてしまった。女の徴しるしを見て三年に満たぬエクスターシャに比べれば無花果と桃ほどにも違うたわわな乳房も、真夏の草原の夕暮れにも似た濃密な亜麻色の叢も、すべてが白日の下に曝される。

二人の修道僧はアクメリンの裸身を弄んではせずに放り出して、馬車の屋根から材木を降ろし、縄で縛り合わせ鋸を打ちつけ、人の背丈の五割増しほどの大きな十字架を組み上げた。両手で胸を隠してうずくまっているアクメリンの背中に十字架を載せ、両手を引き広げて横木に縛り付けた。さらに、胸と腰を縦木に縛り付ける。ことに胸は――乳房の上下に縄を巻いて、余った縄尻で脇の下と胸の谷間を縦に縛って乳房を縊り出すという、女をいっそう辱しめ不要の苦痛を与える残虐の対象にされた。

腰を縛った縄尻は不必要なほどに余っている。その中程を握って、ゼメキンスがアクメリンの尻を叩いた。

「立て、売女」

その名前はエクスターシャにこそふさわしい。さっきはその微力な救いの手さえ期待していたというのに、海賊どもに従容と翩られているエクスターシャへの蔑視は、未だアク

メリンの裡にあった。

「立たぬか！」

びしいっと、再び尻を縄で打たれた。再びではない。先ほどの追鞭であり、今度のは懲罰の鞭だった。

「違います！」

計算も後々の展開も考慮せず、アクメリンは訴えた。

「私はエクスターシャ王女ではありません。侍女長のアクメリン・リョナルデです。海賊の目を欺くために、入れ替わっていたのです」

ゼメキンスは振り上げていた手をいったんは止めたが、しばらく考えた後に、渾身の力でアクメリンの裸身を鞭打った。

「きゃああっ……！」

「おまえが侍女であるなら、共犯者となろう。裁きによっては微罪で済むかも知れぬが、罪人に変わりはない。立て。立って、罪を引きずって歩け」

「共犯などと……私は、ただ、国王と父に命令されて、やむなく王女殿下に仕えていただけです」

「申し開きは取調べの場で述べよ。目的の街へ着かねば、取調べも出来ぬぞ」

恐怖と痛みとに咽び泣きながら、十字架の

重みを背負って、アクメリンは蹠跟と立ち上がった。そこへ、下から掬い上げるように、縄が乳房を打った。

「痛いっ……！」

ふたたびアクメリンは、がくりと膝を突いた。背中に脇腹に容赦なく縄が叩きつけられる。

「お願い……もう、叩かないでください」

ゼメキンスは無言で縄を振るい続ける。肉を打つ湿った音が、真夏の青空へ吸い込まれていった。

ようやくアクメリンが立ち上がったときには、白い裸身の至るところに赤く太い線条が刻まれていた。

アクメリンが歩き始めても、縄の鞭は止まらない。しかし、その間隔は間延びして、音も格段に軽くなった。

ゼメキンスは罪人を追い立てながら修道僧のひとりと呼び寄せ、何事かを命じた。その修道僧は護衛兵の長に命令して――五騎の兵と共に街の方角へ走り去った。事実が侍女と称する女の申し立てる通りなら、当然に本物の王女を捕らえるためだった。

その間もアクメリンは、縄に追われて街とは反対の方角へ、荒野の彼方へ向かって歩か

されている。しかし、その歩みは常人の徒歩よりもはるかに遅い。十字架の重さもあるが、その先端が地面を引きずっているせいだった。背中を起こすこともできず、前へ転びそうになるのは、引きずっている十字架の重みで釣り合いが取れている。

護衛の兵たちも馬を降りて、若い娘が全裸の羞恥に悶えながら、縄で鞭打たれて、よたよたと十字架を引きずるのを、飽くことなく見物している。若い兵にいたっては、アクメリンと同様、前屈みになって歩いている。

暑い真夏の日射しを浴びて、アクメリンの全身に吹き出る汗は、すぐに乾いて白い塩の粉となる。さながらキャゴットは、その塩を縄ではたき落とす仕事をしているようでもあった。

一時間と歩かぬうちに、アクメリンは参ってしまった。

「お願いします。すこしの間でいいですから、休ませてください。この十字架を下ろさせてください」

返答は、無言のしたたたかな縄鞭だった。

「きひいい……」

掠れた声でか細い悲鳴を上げ――アクメリンは弱々しく足を運ぶ。王女の身の回りの世

話をして、ときには王女に代わって重たい荷物（といっても、せいぜいは分厚い書籍や花を活けた花瓶だが）を運ぶとはいえ、淑女である。自身の重みの半分よりも重たい荷物を背負って素足で荒れ地を歩くなど、目も眩むような重労働だった。

三十分ほどもすると、のろい足取りさえ滞りがちになる。

「水を……せめて、水を飲ませてください」

真夏の炎天下で肌を焼かれながら歩けば、体内の水分は急速に失われていく。縄鞭が怖くて我慢をしていたけれど、息をしても喉に貼り付くほどになっている。

「ふむ。罪人とはいえ、いささかは慈悲を垂れてやらねばな」

まさか叶えられるとは思っていなかっただけに、アクメリンは加虐者に感謝の念さえ抱いた。

二人の修道僧が十字架を裏返しにして、アクメリンを仰向けに寝かせた。顔の横にゼメキンスが立った。法服の前をくつろげて、魔羅をひり出す。

（……………？！）

乙女とはいえ、アクメリンも殿方の淫部を見たことくらいはある。しかし、立小便姿を

遠目に指の間から垣間見るのとは違い、真直に見上げるそれは、男の顔をすっぽり隠してしまうほどにも巨大に、そして醜悪に見えた。

「口を開けろ。水を飲ませてやる」

アクメリンは、逆に口を堅く閉じて顔をそむけた。この状況では、男の悪意を勘違いしようもない。

ゼメキンスは無言で放尿を始めた。筒を持って、正確に口元に水流が当たるようにする。「んぷ……！」

飛沫を避けて目も閉じる。

じょろろろろ……耳の中にまで小便を注がれて、あわてて顔を振ればもろに唇に当たる。

アクメリンは目も口も閉じ、息を詰めて———どうにか、小便を飲まずに済ませた。のは、一時の気休めでしかなかった。

「うまく飲めぬようだな。おまえたちも、ちゃんと飲ませてやれ」

おまえたちとは、ゼメキンスに付き従う修道僧と、十五人の兵士たちのことである。

修道僧の指図で、二人の兵士がアクメリンの顔の両側に立った。これでは、どちらへ顔をそむけても、無論正面を向いても、放尿が口元を直撃する。

「肌が破れて血を流しておる。皆で洗ってや

れ」

さらに二人の兵士がアクメリンを挟んで腰のあたりに立つ。残りの兵士どもは、アクメリンを囲む四人の後ろに並んだ。

四人ずつがアクメリンに尿を浴びせる。十字架に向かって放尿するとは畏れ多いと萎縮する兵もいたが。

「穢れた女を清めるのだ。汝らの放つ水は、聖水も同然なるぞ」

屁理屈にすらなっていないが、基督者の中で教皇に次ぐ高位にある枢機卿の御言葉を疑う不信心者など居なかった。

アクメリンはアクメリンで。重荷を背負わされ縄鞭で荒野を追い立てられながら、次第に膨らんできた疑念と恐怖とが、その言葉ではっきりと裏付けられた。それは——王女は『証人』としてデチカンへ招請されたのではない。まさしく背教者、焚刑で清められるべき重罪人として連行されているのだ。

「まだ飲まぬのか。強情者め」

ゼメキンスがあたりを見回して。

「腹を踏めば履物が汚れる。あれを使え」

路傍に転がっている大きな石を指差した。それだけで修道僧は意図を察して。両手で石を持ち上げて——腰の高さから、アクメリン

の腹の上に落とした。

「あぐっ……」

たまらず呻いて半開きになった口に尿が注ぎ込まれる。

「らゝらゝらゝ……」

吐き出そうとした息が、うがいのような音になった。そして、幾分か喉を通してしまった。

「げふっ……らゝらゝらゝ……」

おぞましさに悶えながら、それでもわずかに渴きが癒されて……アクメリンは無意識裡に口中の水分を嚥下していた。生温かく微かにしょっぱくえぐい味だが、干天の慈雨でもあった。

アクメリンが口を開けて小便を受け入れる様を見て、兵士たちがげらげら嗤う。

髪までぐしょ濡れになったアクメリンを十字架の上に放置して、一行は三十分ほどの休止を取った。その間にアクメリンの裸身は天日で乾いたのだが、どうにも肌が突っ張るように感じられたのは、縄鞭に打たれた名残の疼きなのか、実際に小便の影響なのか。

そんなことは、荒野の引き回しが再開されれば、気に留めるに値しない瑣末事だった。アクメリンの足取りは、いよいよ重くなって。

これ以上は追い立てても無駄とゼメキンスは判断した——のか、デチカンまでの長い旅程の初日から痛めつけ過ぎては、差し障りがあると考えたのか。赤ん坊が四つん這いで進むよりも遅く歩むアクメリンに与える縄鞭は、せいぜい十歩に一度、それもかなり手加減していた。

とはいえ。屋外で大勢の男に裸身を晒すことも、縄で縛られることも、あまつさえ鞭打たれて追われることも、何もかもが即座に失神しても不思議ではない恥辱であることに変わりはない。この先、自分はどうなるのかという不安さえ、漠然として形が定まらなかった。

やがて——休止の後に二時間も歩かされた頃、小さな川に差し掛かった。橋は見当たらない。轍の跡が川の中へ消えているところを見ると、浅瀬伝いに徒^か渉^ちで渡るのだろう。

一行は川の手前で止まると、荷馬車から荷物を卸して天幕を張り始めた。夕暮れには間があるというのに、夜営の準備だった。

ようやくに、アクメリンは十字架から解き放たれた。が、それは次の残虐を与える手続きに過ぎなかった。アクメリンは、縄ではなく太い鎖で後ろ手に縛られ、脚も逆海老に折

り曲げられて手首につながれた。

「この娘は背教者であるから、当然に魔女の嫌疑もある。それを、この機会に確かめておく」

魔女は水に浮くと謂われており、このように重たい鎖で縛ってさえ沈まない。余が司祭だった頃に、この手法で魔女の正体を暴いたこともあると、ゼメキンスは得意気に説明した。

「そんなときや、重たい鉄の箱に縛り付けたんじゃないですか、ゼメキンス猊下」

肘から先を軽く上げて尋ねた兵士は、他の者と変わらない服装をしているが、腰に吊るした短剣には装飾を施し、手には指揮杖を握っている。

「ふむ、そういう手もあるな——レオ・モサッド隊長」

ふたりは名前を呼び合うことで身分を超えて、少なくとも兵の前では大っぴらに語れぬ昏い部分を認め合い、同時にモサッドはゼメキンスに一目置かせたのだ。千年より昔のアルキメデスは忘れ去られ、甲鉄船など存在しない世界では、重い鉄の箱が水に浮かぶなど、無学な庶民には神の奇跡か悪魔の呪いとしか思えないのだ。しかし、そんな子供騙しをゼ

メキンスは否定した。では、どうしたかという
と――それは、後の章で明かされるであろ
う。

それはさておき。二人の兵士に抱え上げら
れ川の真ん中へ運ばれても、アクメリンは、
これから水中に放り込まれるという恐怖ど
ころではなかった。というのも。水に濡れるの
を嫌って裸足になり、枢機卿猊下の御言葉を
頂いて下半身まで露出した兵士は、ことさら
に逸物をアクメリンの肌に擦りつけ、肩を持
ったほうの男などは顔をそむけるのを腕で阻
んでおいて、亀頭を唇におしつけるなどとい
う荒業にまで及んだ。

アクメリンは初めて、男のその部分が巨大
化するという事実を知った。その驚きとおぞ
ましさが、心の大半を占めていた。だから、
不意に宙へ放り出されて。

「きゃああっ……?!」

ざぶんという水音の後は悲鳴が泡に変じて。
無用心に息を吸い込み、鼻の奥に焼けるよう
な痛みを感じて……狼狽して息を吐き、反動
で大量の水を吞んでしまった。

川面に浮かぶ泡の様子で溺れ死なす危険を
感じたのだろう、アクメリンはすぐに引き上
げられた。

「げふっ、うゝえゝえゝ……」

水を吐き、肩も腹も波打たせて息を貪るアクメリン。

その息が治まるのを待って、ゼメキンスが温情あふれる非情を命じた。

「つぎは、息を止められるように合図をしてやれ」

「それじゃ、いくぜ。せーえのお」

身体を大きく振られて、アクメリンが叫ぶ。

「待ってください！」

兵士が手を止めた。

「ほんとうに、私は王女殿下ではありません。それに、王女殿下は証人だとおっしゃったではありませんか。背教者とか魔女とか、話が違います」

事を荒立てずに王女をアルイェットから連れ出す詐術だったろうと、見当はついていた。身代金など払わずに身柄をかつさるうのだ。西方社会全体を後ろ楯に持つ教会の権威とはいえ、その場で対立すれば、守備兵と海賊と合わせて六百人に対して、わずかに十騎。後詰が駆け付けたところで二十騎。逮捕連行よりは証人喚問のほうが、無難だろう。

「そうとも。おまえが王女であろうと侍女であろうと、大切な証人だ。教皇聖下とデチカ

ン市民の前で、フィションクの反逆を証言して、それから裁きを受けて罪を贖うのだ」

聖職者であるわしが虚言を弄するはずもなかろうと、嗜虐をいけしゃあしゃあで上塗りするゼメキンス。

「溺れ死んで魔女でないと証明できれば、いささかは罪も軽くなるだろう」

兵士に命じて、アクメリンを水中に投げさせる。

今度はアクメリンも息を止めていたので——長く苦しむ結果になった。身体を水に浸して洗う習慣さえも、無いに等しい。顔まで水中に没するのは、それだけで恐慌をもたらす。しかも縛られていて、自分では脱せられない。いっそ息を吐き出してしまえば、さっきみたいに引き上げてもらえはしないだろうか。けれど、猊下は溺れ死ねと言われなかっただろうか。試してみるなど、とんでもない。

などと考えを空回りさせているうちにも息が苦しくなって、見上げる水面の煌めきがすうっと暗くなっていき、頭が激しい痛みに襲われて——結局は大量の泡を吐いて水を吸い込んでしまい、意識を失って後に、おそらく断末魔の痙攣をが起きるのを待って、ぎりぎりを引き上げられたのだろう。

背中に強い衝撃を受けて、アクメリンは意識を取り戻した。

「あ……」

足を投げ出して座っている自分に気づいた。もう、鎖で縛られてはいない。けれど、両腕を強く後ろへ引っ張られて……どんっと、また背中に衝撃があった。

「げふっ……うえええ」

喉から大きなしゃっくりが飛び出して、その後に嘔吐が続いた。激しく水を吐いて、息を貪って。

両側から腋の下に腕を入れて引きずられて、大きな樹を背中にして立たされた。手首に縄が巻かれ、樹を背中に抱く形に縛り付けられた。足を開かされて、同じように縛られる。腰にも縄が巻かれて、兵士が手を放しても立った姿のままになった。

その頃になって、ようやくアクメリンは人心地を（かろうじて）取り戻していた。次は何をされるのかと怯える。赦しを乞う無意味さを、早くも悟っていた。

兵士たちは全裸の娘を無視する態を装いながら（そうでないのは、目の動きで分かった）、夕食の準備を始めた。武具の手入れをする者もいれば、川縁へ行き上半身を裸になって汗

を拭う者もいた。

(なんと淫らな……)

たとえ人目に触れなくても神様が御覧になっている。たとえ身体の汚れを取るためであっても、裸体になることには禁忌の念がつきまとう。それを、この兵士たちは野外で大勢の目に平然と衣服を――そこまで考えて、アクメリンは、おのれがどのような姿にされているかを思い出して、あらためて羞恥に悶えた。と同時に、わずか半日で荒野の最果てまで追い立てられたのだと、思い知った。これからは、これまでの一切の常識が通用しないのだらう。

やがて食事の仕度が調い、兵士たちがてんでに食べ始める。

溺れ死ぬ寸前まで追い込まれて、皮肉なことに喉の渇きは去っていた。そうになると、たとえ生まれて初めての重労働で疲労困憊の極にあっても、旨そうな匂いを嗅げば空腹を意識する。物欲しげに兵士たちの食事を眺めていたつもりはなかったのだが、あるいはそうだったのかもしれない。

ゼメキンスが、炙り肉を刺した木の枝を片手に、アクメリンの前に立った。

「明日は、もったきついぞ。たっぷり食って

力を取り戻しておけ」

炙り肉をアクメリンの口元すれすれに近づける。

他人の手から食べ物を口に入れてもらうなど、この十年、いや十五年に渡ってなかったことである。しかも相手は近しい人どころか、彼女を虐待している張本人だ。

アクメリンは迷って、しかし芳醇な肉と香辛料の匂いに鼻をくすぐられて、空腹には勝てなかった。食べておかなければ、ほんとうに倒れてしまうでしょうと、みずからに言い訳をしながら、口を遠慮がちに開けて肉をかじろうとする——と、ゼメキンスはついと手を引っ込めた。

ゼメキンスは肉を大きくかじり取って、くちやくちやと音を立てて咀嚼しながら。片手をゆっくりと伸ばして、樹に縛り付けられて身もがきもままならぬアクメリンに意図を悟らせながら、乳房をわしづかみにした。

「ん……」

顔を近づけて、接吻をする形になる。

「……？！」

アクメリンは顔をそむけたが。いつの間にか樹の後ろへ回り込んでいた修道僧が、顎をつかんで正面を向かせる。

「んんんっ……？！」

アクメリンは生まれて初めての（父母や兄も含めて）唇への接吻を奪われただけでなく——不用意に薄く開けていた口の中に、咀嚼され唾にまみれた、汚物としか感じられない肉を押し込まれた。

ゼメキンスが顔を離すと、アクメリンは直ちに汚物を吐き出した。

「この罰当たりが！」

ばしん！

顔が真横を向いたほどの痛烈な平手打ち。

「枢機卿である余が聖別した食べ物を吐き出すとは何事ぞ。やはり、おまえは魔女なのか。それなら、相応に扱ってくれるぞ」

とっくに、そのように扱われている。そうは思ったものの。魔女に待っているのは焚刑だ。その前に、凄まじい拷問に掛けられて余罪をことごとく自白させられるという。海賊どもに犯されるだろうと分かっているが、エクスターシャを騙してすり替わったのも罪には違いないし、指輪を与えて偽りの安心を抱かせたのも罪だ。自分が侍女にしか過ぎないと分かってもらっても、魔女だと決めつけられれば、この旅路の果てに待っているのは拷問と業火だ。

ゼメキンスが、残りの肉を頬張った。わざと口を開けて、咀嚼する様子を存分に見せつけてから、再び顔を寄せてくる。

アクメリンは観念して口を開け、その代わりとでもいうように目を固く閉じた。口をふさがれ、生温かい汚物を押し込まれて——吐き気をこらえ、息を詰めて嚥下した。口の中に肉の濃厚な美味が残ったのが、むしろ惨めさを強調する。しかし、わずかでも食べ物を口にして、吐き気を凌駕して空腹が募った。枢機卿に替わって修道僧から口移しに咀嚼物を与えられても、もはやアクメリンは拒まなかった。いや、すぐには嚥下せず、みずからも数回は咀嚼して肉の味を堪能してしまった。

肉だけではなく麵包も水も同じように与えられて——アクメリンは屈辱の夕餉を終えたのだった。

そうして、新たな恥辱に直面する。

重荷を背負わされて炎天下を歩かされ、摂取したわずかな水分の何倍もが汗で失われている。しかし、真夏とはいえ夜は冷える。飲まずとも尿は溜まる。

「お願いします」

アクメリンから二十歩と離れていないところで、わざわざ焚火を半円に囲んでいる七八

人の兵士に向かって訴えた。

「ほんのしばらくだけでいいですから、縄を解いてください」

「枢機卿猊下のお指図がなけりゃ、おめえに手は出せねえんだよ」

「チンポもだぜ」

兵士どもが卑猥に嗤う。

半畳は無視して、アクメリンは食い下がる。

「では、お取り次ぎを」

「いったい、何をしたいんだよ。子供の使いじゃねえんだ。行ったり来たりはご免だぜ」

「……………」

アクメリンは唇を噛んだ。が、羞恥に逡巡した末の訴えだった。もはや切迫している。

「……お花を摘みに行きたいのです」

註記：この婉曲表現は、近年になって女性も登山をするようになってから日本で生まれたという説があるが、筆者はこれを採らない。入浴ですら忌避した当時の西欧人は、昭和のアイドルの如くウンチやオシッコなどしませんといった態を装い、ために便所などを家屋に設けることはなかった。この物語より後年の話にはなるが、かの壮麗なるベルサイユ宮殿なども、花畑は悪臭ふんぷんたるものであったという。

「花遊びなんかしてる場合かよ」

「さすがは王女様であらせらるるぜ」

焚火の炎が揺れるほどの爆笑。

この者たちは分かっていると、アクメリンは確信した。分かっている、羞ずかしい言葉を言わせようとしている。今もって心臓が拍ち続けているのが不思議なほどの恥辱を浮けているというのに、今さら、これしきのことを羞ずかしがっても詮のないことだ——と、絶望を交えておのれを叱咤する。

「おしっこをしたいのです」

アクメリンは、知る限りのもっとも卑属な言葉を口にした。言い終えたその口から嗚咽が漏れる。さんざんに虐げられ辱しめられて悲鳴を叫び涙を流しても、こんなふうに弱々しく咽び泣きはしなかったのに。

女の、ことに若い娘の涙に男が弱いのは、洋の東西も時代も問わない。

「分かった、分かった。枢機卿猊下をお願いしてきてやるよ」

兵士のひとりが立ち上がって、馬車の近くに張られた天幕へと向かった。すぐに戻って来たが、その表情から娘への憐愍は消えていた。

「猊下が仰せのことにゃあ、庭園には花だけ

でなく噴水も付き物だってよ」

アクメリンだけでなく兵士どもも、怪訝な顔になったが。

「つまり、おめえが噴水台になれとさ」

一拍を置いて、遠慮がちな嗤いが起きた。

「へっへっへえ。王女様の立ち小便か。さぞや見事な噴水を拝めるだろうぜ」

先ほどの陽気な嘲笑とは違って、淫湿にくぐもっている。

放尿を他人に見られるなど、裸体とは比べものにならない恥辱である。いずれは決壊すると分かっている、必死に堪えるしか、為す術を知らないアクメリンだった。

さらに少しばかり時が過ぎて。すっかり夜の帳とぼりが下りた荒野に蹄の音が近づいて来た。枢機卿が天幕から姿を現わすと、アルイェットへ派遣した修道僧をアクメリンの前で出迎える。

「エクスターシャ王女の侍女頭は、確かにアクメリン・リョナルデという娘です」

では、申し立ては信じてもらえるのだと、エクスターシャへの後ろめたさを感じながらも安堵したアクメリンだったが。

「しかし、今はアルイェットに居りません」

まさか、騒ぎを知って、幼馴染である私を

見捨てて逃げたのでしょうか——と、逆恨みするアクメリンだったが。

「一昨日の大嵐を突いて大頭目が出帆したそうですが、彼の娘は人身御供として連れて行かれたとのことですよ」

「海の怪物への生贄か。迷信深い連中は度しがたいわい」

アクメリンは呆然自失。海の藻屑となられては、身の証の立てようがない。

うおおおっと、さすがに枢機卿の御前だけに控え目な喚声が湧いた。上から下へと迸る噴水が、ついに出現したのだった。

絶望のどん底で、アクメリンは羞恥に悶えるところではない——とは、救いにはならないであろう。

「ふん、したたかな魔女であるな」

言葉の綾か、本気でアクメリンを魔女に仕立てるつもりか、ゼメキンスが吐き捨てた。

「死者に罪を押し付けようとてか。そのような詐術に誑かされはせぬぞ」

気が遠くなりかけているアクメリンは、その言葉を否定するところではない。ゼメキンスにしてみれば、罪を認めたも同然だった。

「侍女が死のうが生きようが、知ったことではない。ここに王女が捕らわれており、その

身分を明かす品々も揃っておるわ」

連行（すでに、そんな生易しい扱いではなくなっているが）とはいえ名目は証人喚問であつたから、身の回り品を携えることは許されていた。当然にアクメリンは、額冠と首飾と指輪とを身に着けていた。着衣は檻褸屑にされたが、それらの品はゼメキンスの手に落ちている。

ゼメキンスは、しばらくアクメリンの傷付いた裸身を眺めていたが。

「この者を歩かせておつては、マライボまで一週間は掛かろう。明日は、ちと工夫してみるか」

工夫も何も、馬車に乗せるか、辱しめを与えるなら裸身に縄を打って馬の背に縛り付けられれば済むものを――とは、傍らでゼメキンスの独白を耳にした兵士たちの感想ではあつた。

アクメリンは樹に縛り付けられて、立ったままの一夜を強いられた。極度の疲労がアクメリンを底無し沼のような眠りに引きずり込み、恐怖と不安とがアクメリンを地獄のような現実へ引き戻す。狼の遠吠えなどよりは、夜當地の四隅に配された立哨兵のおぼろな影のほうが、よほど恐ろしかった。

夜が明けるとすぐに、ゼメキンスが様子を窺いに現われた。

「花を摘みたいとか言うておったが、肥料を施す優しさは持ち合わせておらぬようじゃな」

人糞が肥料に使われるとは知らない貴族令嬢には、言葉の意味が分からなかった。

それはともかく。朝食も、夕餉と同じ作法を強いられた。ただし今度は枢機卿おんみずからでも修道僧からでもなく、モサド隊長を筆頭に二十人の兵士どもが入れ替わり立ち替わりだった。ひと口ごとに、乳房を揉みしかかれ尻をつかまれ股間を撫でられた。ゼメキンスほどに強く乳房を握り潰す者はいなかったし、なによりも指挿れは嚴重に禁止されていたのが、せめてもの慰め——などとアクメリンが思うはずもなかった。

朝食が終わると、速やかに進発の準備が調えられた。焚火の跡始末と天幕の収納、そしてアクメリンの十字架への磔である。

その磔は、前日とは趣を異にしていた。手首にだけ縄を巻いて手の幅ほどの長さを余して横木に結び付ける。胸は縛らず、腰と縦木も緩くつなぐだけ。そして、三角柱に削られた杭が、縦木へ股間すれすれに打ち込まれた。十字架の上にアクメリンを仰臥させたまま、

左右の足首それぞれに長い縄が結ばれる。縄尻は兵士が乗る二頭の馬の鞍につながれた。

「昨日は歩き詰めのうえに、夜も立たせっぱなしで、余もいささか可哀想に思っておる。今日は寝たままで運んでやろう」

悪意を剥き出しにした猫撫で声に、アクメリンは何をされるか分からないままに戦慄する。

「先頭より順次、前へー進メッ」

槍を立てた二騎が露払いとなり、その後ろにアクメリンをつないだ二騎が歩き始めるとすぐに、アクメリンは我が身で悪意の正体を知ることとなった。アクメリンの両脚は左右に引き裂かれ斜め上へ引き上げられて、十字架の頭が地面を引きずる。

「痛いいいっ……！」

引っ張られているのは、アクメリンの裸身である。裸身が足を先にして前へ進むと三角の楔が股間に食い込み、十字架も引きずられる。手首や腰に負担が分散せぬように、その縄は緩められている。

「くううう……」

これまでに経験したことのない異様な股間の痛みに、アクメリンの呻き声は絶えることがない。しかし悲鳴にまで至らないのは――

三角柱の稜線が、赤ん坊の小指ほどには丸められているからだった。

この苦痛がどれほどのものであるかを現代の事物で想像するなら、女兒が重たいランドセルを前後に抱えて、テニスコートのぴんと張ったワイヤーに跨がるのと同じくらい——であろうか。

しかし、十字架の頭部が地面の凸凹に当たる衝撃が加わるし、なにより自分の意思で下りることができない。

ぽっく、ぽっく、ぽっく、ぽっく……

ずりっ、ずりっ、ざんっ、ずりっ……

「くっ、くうう、ひいいっ、ひいい……」

切れ味の悪い鉋を繰り返して股間に打ちつけられているような苦痛が繰り返されるうちに、三角柱が食い込んでくる部位よりも奥のあたりに、微かだが妖しい疼きが灯った。これもまた、アクメリンの知らない感覚だった。

苦痛は、繰り返されるうちには少しずつ麻痺してくる。麻痺は言い過ぎとしても——冬が到来すれば、寒い寒いと思いながらも次第にそれを受け容れて日常を営むようなものであろうか。

しかし、腰の奥に生じた疼きは、そうではなかった。微かな疼きはすぐには消えず、む

しろ新たな疼きが積み重なっていく。

「くうう……痛いのに？ ああっ……んん」

苦痛を訴える呻きに戸惑いが混じり、ついには艶がかってくる。

ゼメキンスを乗せた二頭立ての馬車は、十字架のすぐ後ろを進んでいる。枢機卿ともあろう御方が窓から身を乗り出して、神に背いた女が悶え苦しむ様を熱心に観察いや堪能している。そして、女囚（あるいは背教者もしくは魔女、それともそのすべて）の表情に苦悶とは異なる色が^{きど}萌したと見て取ると。

「隊長、駆足で進め」

モサドが号令を発して、馬が駆け始める。

ぱからっ、ぱからっ、ぱからっ……

「ぎひいいいっ……！」

アクメリンが悲鳴を上げる。

馬が人を乗せて休まずに歩き続けられる速さは、人間の小走りよりやや遅い。いわゆる^{なみあし}常歩である。これが^{はやあし}速歩を超えて^{かけあし}駆歩となると、常人の全力疾走に近い。当然、それだけ強く三角柱が股間に食い込んでくるし、地面から伝わる衝撃も激甚なものとなる。妖しい疼きなど消し飛んで、苦痛だけが百倍にもなる。

「ぎひいいいっ……やめ、あぐっ！」

赦しを願う叫びが、舌を嚙んで途切れた。
「ひiiiiiiiiii……」

激しく頭を揺すられ打ちつけられて、目が回り意識も霞んでゆく。なのに、激痛だけは鮮明だった。

アクメリンにとってかろうじて救いだったのは、駆歩はせいぜい半時間しか続けられないという馬側の制約だった。馬に体力を使い果たさせると一日の旅程に差し障るので、アクメリンが性的な快楽を覚えたことへの懲らしめは、その半分の時間で終わった。

それでも、アクメリンの股間は三角柱の木肌に擦られて肌が破れ、血まみれになっていた。

こんな荒行を続けさせては、女を女にする以前に女でなくなる——などと考えたのかまでは分からないが、馬に休息を与える時間を使って、ゼメキンスは女の運び方を変更した。

縄をたるまらず手首を横木に緊縛して二の腕も縛り、脚は閉じさせて足首と太腿を縦木に個縛する。全体に身体がずり上がって、三角柱の杭は股間から離れた。さらに腰も十字架にきつく縛り付ける。胸には縄をまわさなかったが、双つの乳房はそれぞれ力まかせに引き伸ばしたうえで根元を長い縄で巻いた。

「くうう……」

股間に切れ味の悪い鉋を打ちつけられる痛みとは違う種類の鈍痛。これだけなら、(あくまでも) しばらくは耐えられなくもないが——これまでの経験はアクメリンに、その長い縄尻が馬で曳かれるだろうと教えていた。

果たして。

「先頭より順次、前へー進メッ」

今度は頭を先にして十字架が、いやアクメリンの裸身が引っ張られる——乳房を介して。

「ぎびひいいっ……痛いいいっ！」

信じられないほどに乳房が引き伸ばされて、十字架の頭部が持ち上がり、ずりずりと動き始める。

「ぐううう……」

アクメリンは歯を食い縛って激痛に耐え——られなくても耐えるしかなかった。悲鳴も哀願もゼメキンスには通じない。どころか、いっそうの残虐を付け加えられるだけ。

いったいに、なぜ私はこんな目に遭わなければならないのだろう。その明白な答を、アクメリンは知っている。王女の身分を篡奪した報いなのだ。

けれど。もしも。自分が王女ではなく、下級貴族の娘に過ぎないと枢機卿猊下に信じて

いただければ、赦してもらえないのではないだろうか。そのときは、エクスターシャを売るという良心の呵責に悩むこともない。彼女は海の魔物への生贄にされて、もう地上には居ないのだから。

どうすれば信じてもらえるかは、見当もつかない。申し開きは尋問の場で述べろと、猊下はおっしゃった。では、デチカンまではずっと、このような扱いに甘んじなければならぬのか。アクメリンは絶望しながらも、はるか彼方に希望が見透かせると——それを信じた、いや、信じたい想いだった。

それはしかし、希望的観測とすらもいえない。共犯として罪に問うとゼメキンスは明言しているし、それでは極刑が難しいかもしれぬと考えてか、唐突に魔女嫌疑まで持ち出している。そしてなによりも。尋問とは拷問の婉曲表現であることに、アクメリンは思い至っていなかった。

因縁を遡れば、王女の身分を篡奪した瞬間に、アクメリンの運命は定まっていたのである。

昼の大休止まで、アクメリンは二時間ほども乳房で引きずりまわされた。馬を速駆けさせられなかったのは幸いというべきか、限度

を超える激痛に与えられる恩寵すなわち失神に至らなかったのだからいっそう苦しんだというべきか。

休息のあいだ、アクメリンは昨夜と同じように樹を後ろ抱きにした立ち姿で縛られていた。兵士たちに目の保養をさせるためか、頻繁に縛り方を変えて、手足の末端で血流が滞って壊死するのを防ぐ目的か——おそらくは、その両方だったろう。あるいは。兵士たちが食事をがっついていいる様をみせつける意図もあったかもしれない。アクメリンには口移しの水も咀嚼物も与えられなかったのだから。

兵士たちとは離れて、即席に仕立てられた折り畳みの卓と椅子に着いて二人の修道僧と共に食事を摂ってから、ゼメキンスはアクメリンの身体を（不必要なまで）仔細に調べ始めた。

乳房をわしづかみにして持ち上げ、下乳に刻まれた縄の痕を指でなぞる。

「ふむ。午後は反対向きに曳いてみるか」

指を上へ滑らせて、乳頭を指の腹で刺激して、萎縮している乳首を強制的に勃起させ、さらに爪を立てて引き伸ばす。

「くっ……」

いっそうの残虐を誘引するのを恐れて、ア

クメリンは声を堪えた。それはそれで。

「ふん。強情な娘だの。ならば、これはどうかな」

ゼメキンスは手を下げて、アクメリンの股間に指を這わせた。中指で淫裂を浅く穿つと、探るように上へ掘り進めて……

「ひゃあっ……？！」

恐ろしく鋭くて甘美な感覚が股間の一点を突き抜けて、アクメリンは耐えきれずに悲鳴を上げてしまった。

「ふむ。ますます、魔女の疑いが強まったな」

「え……ひゃうんっ！」

股間のどこかをつままれたような感触とともに、いっそう鋭い甘美な感覚が爆発した。いや、爆発ではない。

くにゅんくにゅんと、股間のどこかをこねくられて、快感と呼ぶにはあまりに異質で凄絶な感覚は、嵐が吹き荒れるがごとくに、いつまでも焉むことがなかった。ゼメキンスが発した魔女という単語など、アクメリンはとっくに忘れている。

「うあああ……なに、これ？ いやっ、怖い……！」

男はもちろん、自身の手でさえ悪戯する^{すべ}術を知らぬ娘は、そのまったく耕されてはいな

いがじゅうぶんに肥沃な処女地を、老練な男の手によって一気に開墾されようとしていた——のだが。種子を蒔かれたたちまち芽吹いて蕾にまで育ったところで、ゼメキンスは手を引いてしまった。

「……………」

気を遣った経験がないだけに、寸前で放り出される惨めさも知らないまま、アクメリンは虚脱して、膝が砕け後ろ手だけで宙吊りにされた形になった。

瞬前まで股間を舐っていた指を唇に触れられて、アクメリンは薄く口を開けて、自然とそれを舐めていた。

アクメリンはゼメキンスに屈したのではない。というよりも。最初から反感も嫌悪も抱いていない。恐怖と畏怖、それだけだった。わけの分からない快感に翻弄されて、アクメリンは朦朧としている。目の前に立つお人は加虐者である以前に、枢機卿猊下であらせられる。神の代理人たる教皇聖下に次ぐ尊いお方。祝福のために差し伸べてくださった指に口づけするのは身に余る光栄。と、理屈立てた行為ではない。物心付く前に洗礼を受け、読み書きや裁縫料理といった女の素養を修めるより先に神への感謝と祈りを教え込まれて

きた、当時にはありふれた娘であってみれば、無意識裡の所作ではあったろう。

血の味がして初めて、猯下の指が触れていた部位を思い出して、羞恥が幾分なりともアクメリンに正気を取り戻させた。

あらためてゼメキンスに、今度は乱暴に股間を穿たれて、ようやくにアクメリンは身をもがいた。が、樹幹にまわされた縄で四肢も腰も縛られていては、指から逃れられるはずもない。そして今度は、甘く凄絶な感覚を掻き立てられることもなかった。指の動きは、股間に食い込んだ三角柱に傷付けられた部分に集中していた。

「痛い……」

アクメリンが、小さな声で苦痛を訴えた。枢機卿猯下への遠慮というよりも、これまでに受けた仕打ちに比べれば、苦痛も羞恥も、それだけでしかなかった。

血まみれになった指を口元に突きつけられて、さすがにためらいはしたが、結局は唇に受け容れた。さらに押し込まれて、そのまま動かないので――血の味を舐めて綺麗にもした。引き抜かれた指が乳房を手拭代わりにしたときは、さすがに屈辱を感じたが、アクメリンはそれを黙って伏し目がちに眺めるだけ

だった。枢機卿猊下というのは、意識の上澄みでの認識。本人でも言葉にするのが難しい意識の底に澱んだ部分では、ゼメキンスに逆らう恐ろしさを存分に悟っている。

ゼメキンスがアクメリンの裸身を執拗に検分した意味は、大休止が終わって出発の準備が始まると、すぐに明白となった。

三度、アクメリンは十字架に磔けられたが、その縛り方は先のどちらとも異なっていた。両脚の縄で裸体を曳いて股間に三角柱を食い込ませるのは朝と同じだったが、十字架の頭部につながれた二本の縄が乳房を巻き、曳き馬が四頭に増やされて、梯形に配置された。内側で先導する二頭には乳房に巻いた縄尻がつながれ、斜め後方の二頭には足首の縄につながれた。

先導の二頭が前へ進むと乳房が下へ引き伸ばされ、次いで十字架の頭部も引っ張られる。アクメリンは背中が十字架から浮くほどになるが、身体はそれほど下へずれない。しかし後続の二頭も歩き始めると、朝と同じように股間に食い込む杭で十字架を引きずることになる。乗手の四人がうまく息を合わせれば、乳房と股間に負荷が分散される。息が合わないと、アクメリンは不規則に乳房を引っ張ら

れて、あるいは脚を左右ばらばらに開閉させられて股間をいっそう挟られる。

もつとも、それをうまく利用すれば、乳房に掛かる負担を増やして股間を休ませたり、その反対もできる。つまり、同じ部位ばかりを責めて傷を広げることなく、幾らかは長時間の輓曳が可能となったのである。ゼメキンスが最初からこの形を考えていて、アクメリンの活きがいいうちは過度に痛めつけようとしていたのか、それぞれの曳き方を試しているうちに着想したのか——それは分からないが。

ともかく午後は、小休止のときもアクメリンは磔のまま放置して、夕暮れ時まで常歩を保って進み続けたのだった。

夜にはやはり、アクメリンは立ち木に固縛されて、兵士たちに裸身を弄ばれながら咀嚼物を与えられた。アクメリンは諦めきって凌辱を受け容れ、あまり我慢することもなく恥辱の噴水も披露した。

そして、兵士たちが——さすがに見慣れてしまった若い娘の傷だらけの裸身などうっちゃって、焚火を囲みながら馬鹿話に興じている傍らで。心身ともに疲弊していたアクメリンは、この二日間の仕打ちに凌辱とか屈辱の

文字を宛てるのが大袈裟に思えるほどの無惨苛烈な拷虐がごく近い未来に待ち構えているとは知らず、絶望に閉ざされた束の間の安息へと落ちていった。

偽りの安息は、夜明と共に終止符を打たれる。

アクメリンを立たせたまま両腕を広げて横木に縛り付けても、根元が地面からわずかに浮くように、十字架が組み直された。

「今日はマライボへ入る。何故に若い娘が素裸で十字架を背負わされておるか、一目瞭然にしておかねばな」

修道僧が二枚の木札を捧げ持つ。長さは肘から手首まで、幅は手の平ほど。厚みは指ほどもない。一枚には“Heretic”、もう一枚には“Maga”と刻まれている。線刻が黒くへこんでいるのは、焼け火箸でも使ったのだろう。

“Heretic”は聖なる言語で異端者、“Maga”は魔女の意味——とは、アクメリンには知る由もないが。これ以上はないほどの苛烈な告発だった。両者ともに、焚刑が最も軽い刑罰である。異教徒は“Paganus”であるが、彼の者は改宗すれば神に救われる。しかし異端者は、神の教えをねじ曲げ裏切ったのであるか

ら、完全に滅し去る以外に救済の途はない。

このような木札が用意されたのだから、アクメリンはすでに断罪されている。ゼメキンスの言う尋問とは、形式上の手続でしかない。いや、ゼメキンス個人にとってはそれ以上に重要な意味があるのだが、それが何であるかは、このような物語を好まれる読者であれば、とっくに御存知であろう。メタ発言は慎む。

ゼメキンスの指示で、“Heretic”の木札がアクメリンの乳房の下にあてがわれた。木札の両端からは細い紐が垂れている。ゼメキンスは乳首を刺激して尖らせ、さらに引っ張り出して、その根元に紐を結んだ。乳首が千切れそうになるほど、紐を引き絞る。

「くっ……」

三日前までのアクメリンだったら、金切り声で苦痛を訴えていただろう。しかし一昨日から続く受難の中では、これしきは「ちょっと厳しい扱い」ですらなくなっている。

とはいえ、左右の乳首に紐が結ばれて。修道僧が、わざと木札を持ち上げてから手を放すと。

「きひいいっ……！」

木札の重みに落下の衝撃が加わって――乳首を刃物で切り落とされたような鋭い激痛に、

アクメリンは涙をにじませた。衝撃が去っても、木札の重みと紐の鋭利とが、乳首を苛み続ける。

しかし、真の残酷はこれからだった。

「悪魔と契約を交わした女は、その身体に悪魔の^{しるし}徴を刻まれておる。そのひとつを、諸君に見せて進ぜよう」

アクメリンは十字架を寝床にして地面に仰臥させられた。二人の修道僧が、左右から脚を開かせて押さえ込む。

ゼメキンスが脚の間にしゃがみ込んで、アクメリンの股間に手を伸ばした。淫裂を指で左右に割り開き、上端に埋もれている肉の芽を爪でほじくり起こした。

「諸君は、これが何か分かるかな」

兵士たちが寄ってきて、輪になって覗き込む。が、枢機卿猊下の御下問に答えられる者はいない。女性器の内側にこのような突起を見るのは初めてだった。

それはそうだろう。入浴で裸になるのさえ憚るのだから、男女の交わりとは衣服をずらして闇の中で営むのが当然だった。そして、さすがに建前ではあるにしても、子作りが唯一無二にして至高の目的であるから、ことに女は、性的な快樂に堕ちるのはオナンの罪を

犯すに等しい。そのような環境下で、男がクリトリスの存在に気づくはずもないし、女としても固く口を鎖すであろう。西方社会で公式にクリトリスが発見されるのは、この物語から三百年後である。

もちろん、ある種の職業に就いている女たちの中には、それを知るばかりか有効に活用していた者も少なくなかったであろう。それは男についてもいえるのではなかろうか。どんなに変態的に女を貪っても女から告発されず、むしろ祝福ないし秘蹟として感謝されるような地位にあれば、当時の常識を超えて女体に通曉していたとしても不思議はない。

ゼメキンスは、その知識と技術とを駆使して――肉芽を硬く勃起させた。そして、包皮を剥き下ろす。

「おおっ……？」

どよめきが湧いた。それは、男なら（真性包茎でもない限りは）誰しも目にしたことのある肉体の一部にそっくりの形をしていた。赤ん坊のそれよりも小さくはあるが。

「これが悪魔から与えられた淫茎である。魔女の邪悪さが募ればそれだけ大きく育つ」

ゼメキンスは巧みに刺激して、かつまわりの肉を押し下げて、肉芽を突出させる。

「意図的に悪魔と契約しなくとも、女は本性からして邪悪で淫乱なるが故に、知らぬうちに淫茎を植えつけられる者も居ないではない。そのような女を発見したときには、直ちに告発するのではなく、様子を見定めるのがよろしい」

とは、兵士が好奇心を追求したときに備えての予防線であろう。

「されど、この娘の大きさでは、知らなかったでは済まされぬ。九分九厘は魔女であろう」

腿の上に二枚目の木札を置かせて、小さいなりに弾けそうなまで勃起した『悪魔の淫茎』の根元を紐で縛った。

「い、痛い……」

アクメリンの訴えは黙殺して、二人の修道僧が十字架の横木を持ち上げる。アクメリンは、おのれの意思に関わらず立ち上がらされて。

「痛い……お赦してください」

木札の重みが淫核を引っ張る痛みは、乳首の比ではなかった。

しかし、アクメリンの訴えが聞き届けられるはずもない。どころか、ゼメキンスはさらなる屈辱をアクメリンに準備していた。ここまでの所業は肉体への苛虐であったが、これ

は精神への残酷であった。アクメリンの右手人差し指に王女の地位を示す指輪を嵌めさせ、裸の胸に首飾を垂らし、汚れて乱れた髪はそのままに額冠までも被せたのだ。フィッシュク王家の紋章を知らぬ庶民の目にも、裸で十字架を背負わされ恥部に罪状告発の木札を吊るされている傷だらけの薄汚れた娘が、とにかく高貴な身分であるとは、ゼメキンスの言葉を藉りれば一目瞭然だった。

そうして今日は、露払いの騎馬もなく、アクメリンが隊列の先頭に立たされた。その後ろに騎馬兵が続くが、その槍は立てられずに、穂先はアクメリンの尻に向けられている。歩みが滞れば、追い鞭の代わりにさせるために。

「先頭より順次、前へー進メッ」

さっそくに両側から尻を（ごく軽く）ちくっと突かれて、アクメリンは裸足を踏み出したのだが。

「あっ……？！」

二歩目を進められなかった。木札が揺れて、鋭い痛みが増したのも事実だったが、それ以上に――脚を曳かれて股間で十字架を押し進めさせられていたときに感じたのと似た妖しい疼きが、乳首に奔ったからだだった。というのは、真実の四半分も言い当てていない。

足を前へ運べば、股間から吊り下げられている木札を片側だけ前へ押しやる。その動きは、淫裂から無理強いに縊り出されている淫核に、乳首に数倍する激痛と、同じように大きな疼きとをアクメリンに伝えるのだ。

「前へッ、前へッ」

後方からモサド隊長が叱咤して、その声に合わせて槍が尻を突いた。一回目よりは二回目が強く、三度目には――ぷつっと穂先が肉に突き刺さる音を、アクメリンは肌で聞いた。

「くっ……」

二歩目を踏み出し、槍に怯えながら三步四歩五歩と進み続ける。槍に刺される痛さなど縄の鞭にも及ばないが、刃物というだけで恐怖が募った。どんなにひどく縄で叩かれても死にはしない（多分……）が、槍は簡単に人を殺せる。馬に駆け足で引きずられているときなど、いつそひと思いに殺してほしいと願ったこともあったが、実際に大きな刃物を突きつけられると恐怖しか感じない。

「んっ、んっ、んっ……」

激痛を堪えながら歩く。そのうちに――常歩で緩やかに脚を曳かれていたときと同じような感覚が生じて、次第に募ってくる。

激痛は足を踏み出す都度に生じるのだが、

次の一步を運ぶ前には薄れてきて、そこに新たな痛みがかぶさってくる。けれど妖しい疼きは、長く余韻を引くうちにも次が積み重なってくる。

百歩二百歩と進んで行くと、その積み重なった疼きが一步ごとの激痛を凌駕して、ついには疼きそのものが大きくうねり始める。

「あっ、あっ、あんっ、きひい……あっ、あっ……」

叱咤もされず槍で刺されもしないのに、アクメリンの歩みが速くなり、歩幅も大きくなっていく。十字架の根元が地面を引きずっていないから、おのれの身体の重みの半分ほどを背負って運ぶだけで済んでいるのも大きい。

三点の突起の奥にわだかまる疼きが、いつしか全身を包んで――アクメリンは夢見心地で歩き続けた。

一時間ほどで地平線のかなり手前に、街並がくっきりと輪郭を現わした――というのは、アクメリンの観察力が至らないが故の錯覚だった。実は夜営の場所からも街の城壁は見えていた。その気になれば、昨夜のうちに街へ入れていたのである。そうしなかったのは、先に使いを走らせて、枢機卿猊下をお迎えする準備をさせるためと、アクメリンを飾り立

てて歩かせるためだった。

アクメリンを先頭に立てた二十騎と三台の馬車は、途中で何度かの小休止を挟んで、午後の早いうちには街に着いた。

マライボの統治者や街の顔役、もちろん教会の司祭も正装して、城門で枢機卿猊下を出迎える。遣いの兵士から事情を聞かされているので、アクメリンの淫残な艶姿に驚いた様子もなく、猊下の座乗する馬車だけを見詰めていた。

しかし城門をくぐると、雰囲気は一変した。城門から統治者であるデバイン伯爵の公邸に到る沿道は人で埋め尽くされていた。男ばかりか、女子供の姿も少なくない。公開処刑が庶民の最大の娯楽であってみれば、当然でもある。

うおおおおっと、どよめきが湧いて。先頭を歩かされている裸の娘に視線が集中する。ことに、男たちの目はぎらついている。木札を指差して読み上げては、その意味を大声で吹聴する者もいれば、親指を下向きにして突き出した腕を上下に打ち振る者もいる。後続の兵士に当たらぬよう遠慮がちにはあるが、腐った卵や野菜を投げつける者まで何人かいた。重罪人への非難が吹き荒れるそのすぐ後

ろでは、数人の小さな女の子が大きな籠を持って馬車へ向かって花びらを投げ掛けている。こちらは、枢機卿猊下への祝福である。

公邸に到達した一行は三つに別れた。

ゼメキンスと二人の修道僧は、デバイン伯爵の公式な挨拶を受けるために、そのまま公邸へ上がる。モサド隊長以下の護衛兵は、公邸に隣接した宿舎へ案内される。

そしてアクメリンは、先の二人とは異なる修道僧が指図する使用人たちの手で、公邸の裏手に設けられている牢獄へ連行された。石造りの、小屋と呼ぶには広い、仕切壁のない牢獄の中で、ようやくにアクメリンは十字架を降ろされ、恥辱の木札を外され、王女の身分を証す装飾品は取り上げられて、汚物にまみれた裸身を石床に座らされ、高く上げた両手を、天井から鎖で垂れる鉄枷に扼された。立っているよりは座るほうがまだしも楽だったが、壁から二歩は離されているので、背をもたせ掛けることもできない。

アクメリンの処置を終えると、修道僧ひとりを残して使用人たちは牢獄から立ち去った。「ずいぶんと汚れておるな」

修道僧が、初めてアクメリンに語り掛けた。「ちと綺麗にしてやろう。傷に沁みるかもし

れぬが、我慢せいよ」

修道僧は牢獄の片隅にある大きな桶から水を汲んだ。アクメリンを立ち上がらせて、ちょろちょろと頭から掛けてやる。アクメリンが顔を上向け口を開けて渴きを癒すのを禁じようとはしない。

「いささかの役得は、神様もお許しになられるであろう」

片手で手桶を持って、水を掛けながらアクメリンの裸身をあちこち——おもに乳房と尻と股間を素手で洗ったのか揉んだのか。けっして優しい手付きではなかったが、男どもの乱暴に馴らされたアクメリンにとっては、愛撫も同然だった。それで快感などは生じなかったけれど。

水は手桶に三杯も使って、事実、アクメリンの裸身は見違えるように白くなった。

アクメリンを再び座らせると、修道僧はそれ以上はアクメリンに構わず、壁のいたるところに掛けてある様々な小道具や、壁際に配されている大掛かりな道具を調べに掛かった。

小道具は、数種類の鞭や笞、大小の鉄鉞や鉄の棒、各種の枷といった——拷問に使う道具だとは、アクメリンにさえ見誤りようがない。

大道具は、水平に寝かされた頑丈な梯子とか、座面にも背もたれにもびっしりと釘が植えられている椅子とか、子供が乗る木馬を大きくしたような――まさか遊具ではないだろう。

そんな、命を持たぬおどろおどろしい仕掛けなど、アクメリンは子細に観察する好奇心も勇気もなかった。

それよりも。牢獄へ足を踏み込んだ瞬間に気づいて、そのまま目が離せなくなったのは――二人の娘の存在だった。二人はそれぞれ鉄格子の小さな箱の中で、うずくまって膝を抱えている。そういった姿勢になるしかない、小さな檻だった。あちこち破れてはいるが、一応は服を着ている。顔にも垣間見える肌にも、目立った暴力の痕跡は、すくなくともアクメリンの位置からは見当たらない。

ひとりはアクメリンより五つは歳上の二十半ばだろうか。娘ではなく人妻かもしれない。もうひとりは、ずいぶんと幼く見えるが、服装から判断して貧民らしいから、発育が悪いだろうことを割り引けば、エクスターシャ姫くらいの年齢かもしれない。ということは、アクメリンより三つ下。やはり若い。

二人とも怯えきっていて、修道僧が何か物

音を立てるたびに、びくっと身をすくませている。

いったいに、この二人はどんな罪で囚われているのだろうと、わずかに心が動かないこともないが、どうせ、アクメリン自身が問われている冤罪に比べれば微々たるものに決まっているのだから、共感も同情も湧かない。

それが大きな間違いだったと分かるのは、ゼメキンスが二人の修道僧を従えて牢獄に姿を現わして、すぐのことだった。

拷虐の二：人定拷問

ゼメキンスは、アクメリンにはちらっと目を走らせただけで、二つの檻へと目を転じた。牢獄で待機していた修道僧が差し出す書付を見て。

「ショザウンの娘、ジョイエと申すほうからじゃ」

その修道僧が檻を開け、若いほうの少女を引き出して部屋の中央に立たせた。

「そこの娘と同じ姿になれ」

ゼメキンスが低い声で命じる。

少女はびくっと身をすくませたが。目の前

にいるアクメリンを哀しげな眼で眺めると、のろのろと衣服に手を掛けた。

「何故に、みずからの手で衣服を脱がせておるか、分かるか？」

少女はかぶりを振った。

「そこの娘は、この者らの手で衣服を破り捨てた。二度と服を着る必要がないからじゃ。しかし、おまえは——釈放されても、裸では帰れまい」

はっと顔を上げてゼメキンスを直視する少女。罰を受けずに帰してもらえるかもしれないと、希望を見い出して、幾分か表情が甦った。

「手を止めるな」

修道僧に叱咤されて、少女はあわてて服を脱ぎ始める。てきぱきとまではいかないが、先ほどよりはよほど手際が良い。

少女は、みすぼらしい衣服の下には腰布を巻いているだけだった。さすがに、それをみずからの手で剥ぎ取るのには、ためらいを見せた。

「そのままで良い」

ゼメキンスの言葉に安堵する暇もなく。少女は手をつかまれ、両手首をひとまとめに縄で縛られた。その結び目に、天井の滑車から

垂れる鎖の先に付いている鈎を引っ掛けられて、腕を吊り上げられた。

「最後の一枚は、余が剥ぎ取ってやろう」

ゼメキンスが腰布に手を伸ばす。

「それだけは、お赦してください——神父様」

「馬鹿者！」

修道僧のひとりが大音声で叱責した。

「こちらにおわすは、キャゴッテ・ゼメキンス枢機卿猊下であらせられるぞ」

「ひっ……」

少女が息を呑む。

神父は一般的な敬称であるが、おおむねは教会の筆頭者である司祭を指す。司祭は位階であり、枢機卿は役職であるから、同列には論じられないのだが、司祭はそれぞれの教会に一人、その上の司教となると教区ごとに一人か二人。しかし枢機卿は全世界に二十人とはいない。もしも少女が鎖に吊るされていなければ、その場にひれ伏していたかもしれなかった。

ゼメキンスに腰布を剥ぎ取られても、少女は拒む素振りすら見せなかった。

「ふむ……身体はみすぼらしくても、生えるところには生えておるの」

少女の下腹部には、焦げ茶色の草叢がアク

メリンと変わらないくらいに繁茂している。
腕を高く吊り上げられて露わになった腋の下
にも。

ゼメキンスの言葉に、白い裸身が薄赤く染
まったのだが。

「ふむ……継母を刺し殺そうとしたのだな」

ゼメキンスが、修道僧から受け取った書付
に目を落として少女の罪状を確認すると、少
女の裸身から色が引いた。

「告発に間違いはないな？」

「違います。あの人があたいを刺そうとした
のです。揉み合っているうちに、切っ先があ
の人の腕を掠っただけです」

「あの人とは誰じゃ？」

「……継母の、イディナです」

少女は、厭々といったふうに、その名前を
口にした。

「なぜに、継母はおまえを刺そうとしたのじ
ゃ？」

「……………」

言い訳すらもしたくないといったふうに、
少女は口をつぐむ。

「おまえが父親と媾合っていたからであろう。
継母は恥を忍んで、涙ながらに訴えておった
と、ここに書いてあるわ」

「それは、その通りですけど……父さんはあたいを、何年も前から……あの……手込めに……それで、あの……」

「なんと。おまえは幼少の頃より、実の父親を誘惑して不義を働いていたのか？！」

ゼメキンスが少女の言葉を遮って決めつけた。

「違います！ 父さんが、無理矢理に……」

「黙れ。この淫魔め」

「ゼメキンス様」

牢獄を仕切っていた修道僧が、やんわりと口を挟んだ。猊下とは呼び掛けず、軽い敬称を使ったところに、この男とゼメキンスとの関係が透けて見えるのだが、それはさておき。

「このあどけない少女が淫魔であるとは、それがしには信じられませぬ。当人の申し立てよりは、確たる証拠が必要かと」

「ふむ。それもそうじゃな。ホナー、あれは持って来ておるな」

ゼメキンスに付き従っていた修道僧のひとりが、小さな箱を差し出した。中には、さまざまな得体の知れない道具が並べられている。その中でも比較的に使途が明白なのは――さまざまな太さと長さの棒状の道具だった。

「生娘ではないと申し立てておるのだから、

これで良からう」

ゼメキンスが取り出したのは、怒張した男根にそっくりの、ただし太さも長さも常人の五割増しはあろうかという巨大な棒だった。先端部は、きっちりと亀頭を模している——と見て取ったのは、これからそれを使われようとしている少女と、檻の中の女。アクメリンは、怒張した男根など見たこともない。

「リカード。片脚を持ち上げよ」

もうひとりの従者が少女の後ろへまわり、その左足首をつかんで斜め上へ持ち上げる。

「あ……きゃあっ」

横ざまに倒れかけて、少女があわてて鎖にすがって身体を起こした。

「痛い……です」

訴えを無視して、リカードは少女の腋を片手で押さえながら、左足を肩よりも高く引き上げた。

ゼメキンスが少女の前に立って、模造男根を股間にあてがった。ぱっくり横に開いた淫裂に亀頭部分を埋めて、さらに穴へ押し込もうとする。

「いやあっ……そんなこと、やめてください」

ゼメキンスが、あっさりと模造男根を引いた。身を起こして。

「ガイアスよ」

手持無沙汰に立っている修道僧に顔を向けて、少女を指差した。

ガイアスと呼ばれた三人目の修道僧はリカードの横に並ぶと、少女の頭をぐいと前へ突き出した。そこを目がけて。

ばちん！　ばちん！

ゼメキンスが、少女の頬をしたたかに掌で叩いた。

「余のすることに、指図がましい口をはさむでない。焼き殺されるか無罪放免になるかの瀬戸際ぞ。分かっておるのか？」

「えっ……？！」

少女の顔が恐怖に凍りついた。もののはずみで継母に、ごく軽い手傷を負わせただけなのだから——言い分を聞いてもらえず、継母の申し立てだけが取り上げられたとしても、父は寛大な処分を願ってくれるに決まっているから、せいぜいが広場での鞭打ち。それくらいに考えていたのに、斬首よりも罪が重い焚刑。

「あたい、そんな悪いことはしてません。父さんだって、そう証言してくれます！」

ばちん！　ばちん！

いっそう痛烈な往復の平手打ちが、ゼメキ

ンスの返事だった。

再び股間に模造男根を突きつけられても、少女は再度の抗議をしなかった。潤いのない穴にぐりぐりと捻じ挿れられて、顔を苦痛に歪めながらも無言で耐える。

「ふうむ。これほどの巨大な物を平然と受け挿れるとは、まさしく淫魔であるな」

「そんな……猊下が我慢しろとおっしゃるから……ぎひいっ！」

ぐいっと一気に奥底まで突かれて、悲鳴をあげる少女。

「ゼメキンス様。女の穴はそれぞれに大きさも違うかと」

もしかすると——このガイアスというお方は、枢機卿猊下に付き従っている二人の修道僧とは異なっているのではないか。アクメリンには、彼が少女を庇っているように思えた。冷静に考えれば、ゼメキンスが模造男根による責めだか検査だかを思い立ったのは、ガイアスの言葉である。すこし深読みすれば、最初から台本があったのではないかと思ひ至る。そこに気づかなかったのは、アクメリンが一人でも味方を見つけたかったという焦りであろう。

「ふうむ。では、今しばらく詳しく調べてみる

か」

リカードが少女の脚を床へ下ろして、壁に掛けてある木枷を取ってきた。両端の留金具で閉じ合わす二つ割の板。大小五つの穴が開けられている。少女を開脚させ、いちばん外側の穴に足首を挟んで木枷を閉じた。

「これから、おまえに淫らな悪戯を仕掛ける。信心深き貞婦であるなら、よも乱れはすまい」つまり。性的な刺激を与えて、それに反応すれば淫魔である——と、最初から結果は分かり切っているのだが。

股間から突き出している模造男根の端にホナーが縄を巻いて、抜け落ちないように太腿に縛り付けた。そして三人の修道僧は小さな刷毛を持って少女を囲んだ。ホナーとリカードが両側に立ち、ガイアスは正面にしゃがみ込む。

そして、乳首と淫核を刷毛でくすぐり始めた。

刷毛が乳首に触れるなり、少女はぴくんと身体を震わせて——震わせ続ける。

「く、くすぐったい……」

少女は、しかし刷毛から逃れようとはしない。これが、真っ当な検査であると信じているのだろう。淫核を包皮の上からくすぐられ

ているうちは、それで済んでいたのだが。ガイアスが左手の指の間に淫核を挟んで剥き上げ、その柔肉に刷毛の先を触れさせると。

「いやあっ……ああっ……あんんっ?!」

腰をくねらせて逃れようとし始めた。リカードが、股間から突き出ている模造男根を握って、動きを封じる。

「いや……お赦してください……」

少女はなおも腰をくねらせるのだが、その動きはかえって膣穴を刺激することになり、不本意ではあっても小さな頃から男根に馴染んでいるのだから、新たな快感を掘り起こしてしまう。

「いや……やめてください。くすぐったいです」

しかし、最初に訴えたときとは響きが変わっている。

「いやっ……駄目! やめてえええ……」

切迫した訴えだが、語尾が鼻に抜けている。

三人の修道僧は、いっそう激しくしかし繊細に刷毛を動かして。

「ああっ……こんなの、いやっ! ああ……あんん」

しかし、ゼメキンスの合図で三人がいっせいに刷毛を引くと。

「いやああああ、やめないで！」

「気持ちいいのか。もっとくすぐってほしいのだな？」

ゼメキンスの罌に嵌まって、少女が頷く。

「逝かせてやれ」

三つの刷毛が、また三つの突起を襲って…

…

「ああああっ……駄目！ 落ちる！ 落ちちゃうよおお！」

少女は、あっさりと堕ちてしまった。

「この娘は紛れもなく淫魔であると立証されたな」

アクメリンは、目の前で何が起きているのかを、すぐには理解できなかった。もしも三日前の彼女であつたら、ゼメキンスの言葉を信じていたかもしれない。それほどに、少女の乱れっぷりはアクメリンの常識を超えていた。

しかし。同じ三点を糸で括られて木札をぶら下げられ、その重みと糸から伝わる微妙な震えとに激痛を感じながらも怪しい疼きに悩まされて、ついには忘我に至ってしまった、まだ生々しい記憶が、少女の反応に重なって——性的な快感とは無縁だったアクメリンにも、おぼろな理解を生じさせようとしていた。

と同時に、初めて、枢機卿猊下の御言葉に疑問を持った。彼の言葉が正しければ、アクメリンもまた淫魔ということになりはしないだろうか。

「この娘が淫魔であると判明したからには、これ以上の尋問は不要であるな」

ゼメキンスが唐突な断定をした。

「ショザウンの娘ジョイエよ。汝は淫魔に憑かれておるがゆえに、聖なる炎による浄化が必要である」

恍惚にたゆたっていた少女は、ゼメキンスの言葉が自分の運命を断ち切るものであるとは理解できないようだったが。

「街じゅうに布令を出して、三日後に焚刑に処すものである」

そこまで言われれば、恍惚の余韻どころではない。

「違います！ あたいは悪魔なんかじゃないです。みんな、あの人のでたらめです！」

金切り声に涙を交えて、少女が訴える。

「されど、おまえは若い。魂としては幼いと言ってもよい。これから魂の浄化に励み徳を積むと誓うのであれば——これまでの罪を赦してやってもよいぞ」

「え……？」

急展開の断罪に次いで唐突に示された救済の道。そもそもの理不尽な告発を争うことも忘れて、少女は縋りつくような眼差しでゼメキンスを見る。

「おまえが清らかな魂を取り戻すまでのあいだ、修道院で――左様、いきなり尼にしてやるわけにもゆかぬ。女手の足りておらぬ修道院で下働きをするか？」

奇妙な話ではある。女子修道院なら、そこに居住するのは女ばかりであるし、男子修道院なら必然的に男子ばかりで、女手の不足という言葉は矛盾している。三人の修道僧がひっそりとほくそ笑んでいる様に気づけば、足りぬ女手がどのように扱われるか――しかし、聖職者の集団と姦淫や虐待とは、ゼメキンス以下三人の残虐を身をもって体験してきたアクメリンにさえも、すぐには結び付かなかった。

「は、はい。喜んで、おっしゃる通りにいたします」

少女が安堵ではなく歓喜を迸らせた。修道院での生活は質素でこそあれ、貧窮はしていない。しかも、拒めば暴力を振るってでも実の娘を犯す父親とも、悪意を持って接する継母とも、縁を切れる。

縄をほどかれ、脱いだ衣服を返してもらって。少女は身なりを整えるよりも先に、裸のまま枢機卿猊下の御前にひれ伏して、その足に口づけをしたのだった。

少女はガイアスに案内（後の運命の実態を考えれば、拉致あるいは連行という言葉がふさわしいのだが）されて、牢獄を去った。

――次に、檻の中の年増女（とってしまっては可哀想であるが）が引き出される。

「革鞣し職人ワイマーツの妻、ニレナであるな」

「はい……」

女は、腕を吊られて床に座り込んでいるアクメリンをちらちらと見ながら、あやふやに答えた。女は、おのれがどのような目に遭わされるのか、不安と希望とが混淆している。

アクメリンの裸身は、これまでに種々の虐待が加えられたことを雄弁に物語っている。尻は刃物傷で埋め尽くされて乾いた血がこびりついているし、全身に鞭痕が走っている。乳首と股間には新しい血が滲んでいる。そのやつれた顔に見て取れる表情は、絶望でしかない。それが不安の根源であった。

一方、ジョイエという少女は、裸にされてニレナの目には姦淫としか見えないことをさ

れはしたが、あっさりと許された。

思いが交錯するうちにも、ゼメキンスが女の罪状を読み上げる。

「おまえは、ガカーリイ商会の会頭から魔女の嫌疑で告発されておる。この十日間で、商会の者が五人も病を得たり怪我をしたり——それも、すべておまえの家を訪ねた直後だ」

「そんなのは、言い掛かりです。亭主が商会を通さず直に注文を受けたり、安い手間賃で仕事をしているのを、何とか商会に引き入れようとして、もう半年から嫌がらせをしてきてます。今度のことだって、病気だの怪我だの、嘘に決まっています」

ばしん。

ゼメキンスが、平手打ちで女の申し立てを退けた。

「魔女であるか否かは、調べれば分かること。この女を素裸に剥け」

修道僧が伸ばした手を女が振り払った。顔から血の気が引いている。

女は、ゼメキンスがジョイエに向かって言ったことを覚えていて、それで恐慌に陥ったのだった。みずからの手で服を脱がせるのは、釈放するときに服を返してやるためだ——と。では、服を破られようとしている自分は有罪

と決めつけられているのか。釈放されることのない刑罰、つまり死刑なのか——と。

「自分で脱ぎます。破らないでください」

しかし、女の訴えは再び無視される。リカードが女を羽交い絞めにして、ゼメキンスが正面に立った。

「枢機卿猊下が、御自ら手を下される。光栄に思え」

ホナーの声は揶揄を含んでいる。

ゼメキンスが服の胸元を両手につかんで。

びりりりり……力まかせに引き裂いた。裳裾は上の方だけを破って、下に落とす。さすがに稼ぎのある職人の妻だけに、ジョイエのように上着の下は素肌というわけではなかった。ゼメキンスは手間暇を惜しまず、一枚ずつ破り取っていく。

裸体を隠そうとする腕を背中へねじ上げて、首枷と手枷が一体になった拘束具を女に嵌める。そして。ジョイエに嵌めていた木枷で開脚させて、その枷を天井から垂れる鎖で吊り上げた。後ろ手に拘束され喉を締め付けられた女盛りの裸身が、逆さ吊りになった。

「亭主持ちであるなら、処女でないのは当然じゃな。悪魔が交わるとすれば、尻穴であろう」

ジョイエに使った模造男根を逆手に持って、ゼメキンスが女の後ろへまわった。尻たぶを左右に押し広げ、その奥にひそんでいる紫色の蕾を露わにして先端を押し付ける。

「きゃっ……まさか？！」

「まさか——なんじゃと言うのかな？」

軽く押し付けて、ぐりぐりとこねくる。

「そんなことは、しないでください。まさか枢機卿猊下ともあらせられる御方が、ソドムの罪を犯されるのですか？！」

ゼメキンスが、こねくる手は休めず、修道僧に向かって小首を傾げて見せた。

「そのようなこと、誰に吹き込まれたのじゃ」

「だって……神父様がおっしゃっておられました。子供を作りたくないからといって、そんなことをしたら、雷に打たれるだろうって」

『後デ注意シテオカネバナランナ。具体的ナ教エハ、必ズ、ソレヲ験シテヤロウトイウ輩ヲ生ミ出スコトニナル』

ゼメキンスが聖なる言葉で低く呟くと、二人の修道僧が軽く頭を下げた。ゼメキンスが人の言葉に戻って、女に告げる。

「さよう。ソドムの罪をおまえの身体が受け挿れるようであれば、すなわち悪魔と交わった証拠となるのだ」

「そんな……無理に押し込めば、入るに決まっています」

「試してみれば分かることだ」

いうなり、ゼメキンスは腕に力を込めた。ジョイエが無理強いに絞り出された分泌で、模造男根はまだじゅうぶんに潤滑されていたから。

「ぎゃはああっ……痛い！」

女は悲鳴を上げたが、模造男根はずぶずぶと尻穴を穿った。

「ひいいい……」

さらに中をこねくられたり抜き挿しされて、女は啜り泣く。

「ふむ。確かに悪魔と交わっておるようじゃな。とすると、次なる調査は何をすればよいか分かるな——リカード？」

「はい。悪魔は契約の印を女の身体に刻みます。巧妙に隠されていることが多いのですが、その印の部分は痛みを感じなくなっています。つまり、全身をくまなく針で刺して調べます」

直属の部下として使っている修道僧に、今さら口頭試問でもあるまい。ニレナに聞かせるための言葉だ。

ホナーが箱の中から、さらに小さな箱を取り出して蓋を開けた。びっしりと並んだ、縫

い針にしては太く長すぎるが、金串にしては細く短すぎる——先端が鋭く尖った針金。

註記：現在に伝わる（図などの）探査針は握り柄があるが、これは魔女狩りの嵐が吹き荒れた時代、この物語から百年以上くだった頃の道具である。ちなみに——たとえば釦を押しながら刺すと針が引っ込むような仕掛けを施して、効率良く魔女を摘発したのであるが、それに比べればゼメキンスはまだしも良心的であろう。

「おまえの答は間違っておらぬ。されど、全身をくまなく調べるのは時間の無駄じゃ。悪魔が契約の印を刻む箇所は、ほぼ決まっておる。すなわち、女が嚴重に隠していても疑われぬ場所。たとえば——ここじゃな」

ゼメキンスは小箱から針を取り出すと身を屈めて、女の乳房を鷲掴みにすると横から針を突き刺した。

「痛いっ……お願いです、もうお赦しを……お慈悲を……」

悲鳴には耳を貸さず、いや、妙なる調べを聴くがごとく目を細めて愉しみながら、ずぶりとずぶりと、四方から針を抜いては刺していき、ついには——乳首を正面から貫いた。

「きゃあゝあゝあゝあゝっ……！」

女は顔の半分が口になったような形相で絶叫する。

「ふむ。こちらの乳房には印がないようじゃな。反対側は、リカード、貴公に委ねる」

枢機卿猊下ともあろう高位の者が、一介の修行僧に、ぞんざいな口振りとはいえ『貴公』などと呼ぶ。やはり、尋常の関係ではない。使命に駆られて魔女を狩る同志——ということに、今はしておこう。

「魔女の本性を暴くために、余はこちらをさらに調べてみよう」

ゼメキンスは新しい模造男根を取り出して女の背後へまわり、前の穴へ無雑作に突き立てた。

「くうう……お腹が……裂ける！」

夜毎に（かどうかまでは知らないが）亭主の魔羅を受け挿れている女穴は、亭主の五割増しはあろう逸物をすんなりと呑み込んだ。とはいえ、後ろにも突き刺さったまま。下腹部の圧迫感膨満感は並大抵ではなかろう。

「ふふん。裂ければ、案外とそこから悪魔の肉片なぞ飛び出すかもしれんぞ」

後ろの模造男根を縛っている縄をほどくと、ゼメキンスは前後の棒を両手に握って、交互にあるいは同時に、抽挿を始めた。

「ひいいい……」

それでも、どこか余裕の感じられる呻き声だったが、リカードに乳房をつかまれて息を呑み、すぐに絶叫を迸らせた。

「あっ……ぎゃわあああっ！」

リカードはゼメキンスよりも容赦なかった。長い針が、乳房を外から内へと貫いたのだった。真横に貫くと、引き抜いて上から下へ。さらに斜め十文字に。

そのたびに、女は絶叫する。そして最後には、乳首を正面から――針先が肋骨に突き当たるまで深々と突き通した。

「うがあああっ……！」

リカードが針を抜いて立ち上がる。乳房をつかんでいた手は鮮血に染まっている。いうまでもなく、女の乳房は血まみれ。流れ出た血は胸の谷間を喉まで伝い、顔に数条の赤い線を描いている。

「乳房には見当たらないようです」

「ふむ。やはりな。では、^{かんじんかなめ}肝心要の場所を調べるとするか」

ゼメキンスの言葉がどこを差すか、アクメリンでさえ理解した。

「いやですっ……お願いです……もうお赦してください！」

逆さ吊りにされている女は睫毛から涙をこぼして哀願するが、言葉を交わす間は手を休めていたゼメキンスに抽挿を再開させるきっかけを与えたに過ぎなかった。

「くううう……あっ、あっ……」

亭主に（とは限らないかもしれないが）開発されつくした女体は、残酷な陵辱にさえも、何がしかの反応を示し始めた。ゼメキンスの言葉を藉りれば、魔女が本性を現わし始めたということにでもなろう。

それでも。リカードが淫裂の端をまさぐり始めると、わずかな快感など消し飛んでしまう。

「そこは……お赦してください。いやっ……え？」

リカードはニレナの真っ黒な予想に反して、探り当て掘り起こした肉の突起に、先端の綻びから針先をわずかに挿し入れて――突き刺さなかった。左手で突起の根元を掴まんで固定すると、針先で実核を軽く引っ搔いたのだった。

「あああっ……なに、これ？　こんなの……知らない？！」

数え切れないほど亭主に抱かれて開発し尽くされている（はず）だけに、未知の快感に

戸惑うニレナ。

「ここは痛みを感じないようです」

独り言めいてゼメキンスに語り掛けながら、リカードはいっそう繊細に執拗に針を操って、女から性感をほじくり出す。

「さもあるう。悪魔に植え付けられた淫茎であればのう」

痛覚の無い部分があれば、すなわち悪魔との契約の印と断罪されることなど忘れ果てて、これまでに体感したことのない凄まじい鮮烈な快感に没入していくニレナ。びくんびくんと腰を痙攣させるが、ゼメキンスが操る二本の棒で動きを封じられる。

「あああっ……だめ、おかしくなる。こんなのって……あなた、ごめんなさいいいい……」

女が絶頂に達する瞬間を過たず狙い済まして、リカードが手をわずかに動かした。

「ぎゃわああああっ……！」

乳首などとは比べ物にならない鋭い激痛に貫かれて、女は雲間から奈落の谷底へ一気に突き墜とされた。

「ひいいい……痛い、痛い、いやあああ」

天国から地獄に叩き墜とされて悶え哭くニレナ。

「ふむ。悪魔の印は見当たらぬか」

ゼメキンスが、早々と結論を出す。淫核を悪魔に植え付けられた器官と断じておきながら、そこにも悪魔の印が無いとは――女を責める口実に過ぎないとしたところで、自己撞着も甚だしい。

「そういつまでも、雑魚にかかずらわってもおれぬ」

床に凝然とへたり込んでいるアクメリンを振り返って、舌先で唇の端をちろっと舐めた――この場が審問の場ではなく、宗教的権力を藉りて嗜虐を満たしているに過ぎないと認めたも同然だろう。もっとも、エクスターシャ王女に関しては、当然に大陸的規模の権勢欲も混じっているであろうが。

「我らの手で探すのは面倒じゃな。本人に教えてもらおうとしよう」

リカードが針を淫核に深々と刺し通したまま退いた。ゼメキンスが、こちらは二本の模造男根を引き抜いて、アクメリンの正面へ動いた。ホナーがそれを受け取り、布で汚れを拭き取ってから箱に納める。

「余が立っておるというに腰を降ろしているとは、不敬も甚だしいぞ」

ゼメキンスが足を上げて、アクメリンの股間を踏みにじった。

「あ……申し訳ございません」

未だにゼメキンスを（疑念を押し殺して）加虐者ではなく高貴な聖職者と信じているアクメリンは、手枷を吊っている鎖に縋りつくようにして立ち上がった。滑車を介して壁につながれている鎖が緩んだが、リカードが引き絞って再びアクメリンの腕をいっぱいまで吊り上げた。

その間にホナーが、壁に掛けられていた一本鞭を選び取って、ニレナの後ろに立った。

「我らの会話は聞こえておったろう。悪魔の印をどこに刻んだか、素直に告白すれば、痛い思いをせずに済むぞ」

ゼメキンスは視線をアクメリンの乳房に落としたまま、片手でその柔らかな膨らみを弄びながらの尋問——とは、おざなりもいいところだ。

しかし、ニレナは懸命に訴える。

「そんなもの、ありません。あたしは悪魔と契約なんて、絶対にしていません。悪魔を見たことだってありません。みんな、ガカーリイ商会の言い掛かりです」

ニレナの言葉が終わると同時に、ホナーが長い鞭を振るった。

しゅううん、バシイン！

不気味な風切り音に続いて、肉を打つ重たい響き。

「いやあああっ！」

淫核に突き立ったままになっている長い針が揺れて、苦痛と快感の縋い交ざった刺激が、悲鳴に余韻を含ませる。

「……くうう、んんん」

しゅううん、バシイン！

「きゃああっ！」

しゅううん、バシイン！

「痛いいいっ！」

しゅううん、バシイン！

「きひいいいっ！」

続けざまの鞭に、悲鳴が切迫する。悲鳴の数だけ、白い尻に赤黒い線条が刻まれていく。

「強情を張り通すと、尻だけでは済まぬぞ」

「ほんとうに、悪魔なんて知りません。信じてください」

ゼメキンスが指の腹を上にして、くいと曲げた。ホナーがうなずいて、ニレナの正面にまわって。

しゅううん、バシイン！

「いゝきゝゃあゝあゝあゝっ！」

乳房が横ざまにひしゃげて、ぷるるんと跳ね返り、ニレナがしゃがれた悲鳴を嘔きこぼ

した。

しゅううん、バシイン！

「ぎびひいいっ！」

しゅううん、バシイン！

「うあああっ……猯下のなさりようは、納得がいきません」

鞭打ちから逃れようとしてのことだろうが、教皇に次いで高位の聖職者に庶民が抗議するには、よほどの勇気を要しただろう。

「納得するには及ばぬ。悪魔の刻印をどこに隠しておるか、白状すれば良いことじゃ」

「でも……身体じゅうを傷だらけにしたら、その刻印とやらも見分けられなくなるじゃないですか」

ゼメキンスが、一瞬考え込んだ。では刻印があると認めるのだな——と、揚げ足を取ることもできたろう。しかし、そうはしなかった。

「そうか。もっともな言い分じゃな。それでは、鞭はあと三発だけに留めよう」

「……………」

ニレナは唇を噛んで、沈黙する。十も二十も鞭打たれることを思えば、三発で終わるのなら——しかし、それでも今のような激痛を三度も与えられるのだから、まさかに感謝で

きようはずもない。

どころか、ゼメキンスの言う三発は、これまでの鞭のすべてを上回って苛酷となった。

ゼメキンスが人差し指を立てて、真下に撥ねた。

ホナーが鞭を高く振り上げて。

ぶゆうん、バツヂイイン！

淫裂を真上から、長剣で断ち割るように打ち据えた。

「がはっ……！！」

悲鳴も上げられないほどの激痛に、ニレナの裸身が凝固した。

淫核に突き刺さっていた針が撥ね飛ばされた。石床に叩きつけられた針は銀色の表面が見えないほど血にまみれていた。

「ひいいい……」

ふた呼吸ほども遅れて、弱々しい悲鳴がこぼれる。

「はあ、はあ、はあ……」

荒い息が落ち着くのを待って、ふたたびホナーが鞭を振りかぶる。

「いやあっ……もう、おゆ……ぎゃわあっ！」

一発目と変わらぬ正確さと強さと無慈悲さ
とで鞭が淫裂を切り裂いた——というのは、
誇張ではない。はつきりと血しぶきが飛び散

った。

アクメリンの裸身が弛緩して膝が折れ、鎖で吊り下げられる形になった。同じ女人の身に加えられる残虐に失神したのだった。

鞭打たれる当人のニレナは、逆さ吊りにされて頭に血が下がっているせいもあるのか、束の間の安息へ逃れることすらできずに悶え続けている。

「待て」

次の鞭を与えようとするホナーをゼメキンスが制し、リカードに目を向けてアクメリンを指差す。リカードは隠しから硝子の小瓶を取り出すと、栓を開けてアクメリンの鼻先にかざした。

アクメリンが大きなくしゃみをして、意識を取り戻した。

「良く見ておけ。ニレナへの最後の一発が終われば、いよいよおまえの番なのだぞ」

分かりきっていたことだったが、それでも直截の宣告に、アクメリンは身を振るわせた。

「やれ。手加減は無用じゃ」

ホナーが小さく頷いて、鞭を握る手を大きく後ろへ引いた。

「ああああ、あ……」

エレナが唇をわななかせながら、ぎゅっと

目を閉じた。

ホナーは腕を肩越しに前へぶんまわして——膝を折って身体を沈める勢いまで加えて、正確に鞭先を淫裂に叩きつけた。血しぶきが飛び散る。

「かゝわゝあゝあゝあゝあゝっ……！！」

エレナは猛獣のように吠えて——ついに、安息を得た。

二人の修道僧がエレナを石床へ降ろす。手桶に水を汲んで、血まみれの裸体にぶっ掛ける。襪褌布で水と血を拭き取ると、黄色っぽい軟膏を塗り込めていく。

「馬の背脂に魔女を清めた灰と火から蒸留した酒精を混ぜた、まあ主に祝福はされておらぬが墮天使にも呪われておらぬ、錬金術の秘薬じゃ。傷が化膿することなく早く治る。その分、頻繁に尋問できるというわけじゃな。これからは、おまえにもたっぷりと使ってやる。ありがたく思え」

エレナへの残酷な拷問を見せつけられて、それを何度も繰り返すと脅されて、アクメリンはまたしても気が遠くなりかけたが、かろうじて踏みとどまった。

「申し開きは尋問の場で言えと、猊下はおっしゃいました。ですから、申し上げます。私

はエクスターシャ王女ではありません。海賊どもの目を眩ませるために身代わりとなっていた、侍女頭のアクメリン・リョナルデです。アルエットには、あと二人の侍女も捕まっています。彼女たちにお尋ねください。私の言葉が嘘ではないと、証言してくれるでしょう」

アクメリンは必死に訴えた。延べ三日の旅程とはいえ、それはよろめき歩くアクメリンを追い立ててのこと。馬を駆れば、アルエットまで一日で往復できるはず。

「そのような手拔かりををすると思っておるのか。ミアーナ家の娘とズコバック家の娘。二人の侍女からも証言は得ておるわ。ひとりぬくぬくと海賊どもからお姫様扱いをされて、侍女の処遇など気にも留めぬ王女殿下を、ずいぶんと恨んでおったぞ」

「そんなはずは……」

無いとはいえない。内心では、あの二人もエクスターシャ同様に見捨ててるつもりでいた。指輪を使った小細工も、すり替わりを知っている者の目には、アクメリンの意図まで透かし見えただろう。王女が自分たちと同じように海賊どもに犯される姿を見るうちに、二人の侍女の気持ちは王女へと動いたのかもしれ

ない。

侍女の証言が得られず本物の王女が亡くなった今となっては、アクメリンの身の証を立てる術はない。

「それでもなお、おのれはエクスターシャではないと言い張るつもりかな。侍女ならば微罪で済むかも知れぬからの。命が惜しいか」

王女ではないと言い張れ。そのようにそそのかしているも同然の物言いだったが、追い詰められているアクメリンは気づかない。

「本当に、私はエクスターシャではないのです。どうか、信じてください」

異教徒の男（とはいえ王様）に抱かれるささやかな嫌悪と引き替えに優雅な生活を手に入れる目論見だったのに、身代わりで焼き殺されるなんて、あまりに理不尽だ。

「ふうむ。そのように必死に訴えられてはのう。間もなく晚餐じゃ。その間に考え直してみるか」

「ええっ……ありがとうございます」

まさかの言葉に、悪意がこもっているとは疑わないアクメリン。

「その間、立たせっぱなしも可哀想じゃな。おまえのためにとびきりの座を用意してやるでな」

気を失ったままのニレナを、犬がうずくまるような形で檻に押し込み終えた二人の修道僧が、アクメリンの腕を吊っている鎖も緩めた。その手を背中へねじ上げて、エレナに着けていた首枷と手枷が一体になった拘束具をアクメリンに使う。

「……？」

休ませてやると言っておきながらのこの仕打ちに、アクメリンは不安を搔き立てられる。

ホナーに乳房をつかまれリカードに尻を叩かれて、壁から二歩離れて置かれている木馬の前へ立たされた。それを木馬だと思ったのは——胴体は長さが子供の背丈くらいの材木で、幅は彼女の片腕の長さほどの狭い三角形をしているが、四隅の脚で湾曲した櫓の上に支えられ、胴体の一端からは四角い材木があたかも馬の首のごとく斜めに突き出て、上端にはT字形に握り棒まで付いているからだった。

木馬の真上にも滑車から鎖が垂れている。その鎖が腋の下をくぐって胸を巻いて——アクメリンは完全に床から吊り上げられた。

「ま、まさか……？！」

ゼメキンスの悪意を悟って恐怖におののくアクメリン。こんな尖った材木を跨がせられ

たら、股間を切り裂かれてしまう。材木のまだらな模様は、染み込んだ血の痕ではなかろうか。

「いやあっ……やめてください！」

じりじりと木馬の真上に吊り降ろされていて、アクメリンが藻掻く。一度は稜線の上に立ったが、鎖が緩むと不安定な均衡は崩され、足を滑らせて落ちた衝撃が胸に食い込んだ。それでも、足の裏で切り立った斜面を捉えようとする。ずるずると滑って股間すれすれまで割り裂かれると、内腿で材木を締め付けて留まろうとした。しかし、楔がわずかの力で硬い木を割り裂くのも同じで、材木の先端は容易に会淫にまで達した。さらに、淫裂を割り込んでいく。

「ひいいい……痛い、痛い痛い……」

爆発的な激痛ではなく、じわじわと増す鋭利な痛みに、アクメリンは泣き叫んだ。それでも諦めずに内腿を締め続けているからか、あるいは稜線が硬貨の厚みほどには丸められているせいか、すぐには肌を切り裂かれないでいる。

しかし。滑りやすい急斜面では、どれだけ力んだところで、太腿は滑ってしまう。鎖が緩むと、身体の重みのほとんどが股間に食い

込んできた。

「痛い痛い……お赦してください……」

「ふむ。座り心地が悪いか。もっと足を休ませてやれ」

アクメリンの宙に浮いた左右の足元に、人の頭ほどの大きさの鉄球が一つずつ置かれた。開閉式の鉄環、すなわち足枷が短い鎖でつながっている。ホナーがそのひとつを持ち上げ、リカードが足枷をアクメリンの足首に嵌めた。

ホナーが慎重に鉄球を下げていって、そっと手を放す。

「んぐうううっ……」

アクメリンが、食い縛った歯の隙間から呻き声をこぼす。鉄球ひとつの重さはアクメリンの重みの三分の二はあろう。

鉄球は反対側の足にもつながれて——今度は、脛の高さから放り出された。がくんと、アクメリンの足が引き伸ばされて。

「ぎゃわばわああっ……！」

断末魔のニレナにも負けない絶叫。

「ぐううう……きひいい……」

涙をこぼして苦悶するアクメリンの股間に血が滲んで、細い筋となって内腿を伝い木馬の木肌を朱に染めた。

「お、おゆるし……ください……せめて、お

もりだけでも……」

アクメリンの股間には、自身の二人分を超える重みが加わっている。さらに、鉄球が落下した衝撃。稜線がわずかに丸められていても、楔が体内に食い込むにはじゅうぶん過ぎる負荷だった。

「うぐ……ぐああああ……」

アクメリンの呻き声はいつまでも焉まない。それは、三角木馬の鋭い先端が強い力で傷口に押し付けられているからだけではない。木馬の脚は、湾曲した櫓の上に乗っている。アクメリンが苦痛に身悶えすると、木馬が揺れて新たな激痛を生み出すからだだった。

修道僧が木馬を押さえて揺れを止めた。

「ああ……」

相変わらず激痛は続いているが、それでもすこしは軽くなって、アクメリンは安堵の息を吐いた。しかし。

「仕上げは余が施してやろう」

ゼメキンスが細い紐、あるいは太い糸を取り出した。ホナーがアクメリンの乳房を握り潰す強さで揉みしだき、乳首を無理強いに搾り出す。ゼメキンスはそこに細紐を巻いて引き絞り、反対の端を木馬の首から水平に突出している握り棒に結び付けた。

「では、椅子の座り心地を堪能するがよい」

ゼメキンスが後ろに下がると、二人の修道僧が櫓の後ろを踏み握り棒を押し上げて、木馬を大きく反らせた。

アクメリンの上体が後ろへ倒れて、乳首を引っ張られる。激痛を和らげようと前屈みになって細紐の引きを弱める。しかし、その動作は――稜線にみずから淫裂を押し付ける行為に他ならない。

「そおれっ」

ゼメキンスの掛け声で、櫓の端を踏んでいた足が引かれ、握り棒は下へ強く押された。

ぐうんと木馬が前傾する。

「きゃああっ……！」

身体が前へ滑りかけて、その摩擦が股間をさらに深く抉る。しかし、痛いと呼ぶ暇も与えず、木馬が揺り戻す。今度は後ろへ滑りかけると共に上体がのけぞって――乳首に巻かれた細紐が、ぴいんと張った。

「がはあああああっ……！！」

乳首があり得ないほどに引き伸ばされて、たわわな乳房が紡錘のように歪む。

木馬が揺れるたびに、アクメリンの上体が前後に傾いで、乳首と乳房の変形が繰り返される。さらに、錘の揺れで股間の激痛も前後

に動く。

「ぎゃああっ……いたいっ……とめて……
ごめんなさい……おもりは、このままで……
ぎひいいっ……せめて……ゆらすのだけは
……とめてくださいいいっ！」

ある程度までの責めは甘受すると申し出たも同然の哀願だったが、それすらもゼメキンスには何の感銘も与えなかった——のではなく、嗜虐を満足させたただけだった。

「では、デバイン殿が招待してくれた晚餐に赴こうぞ。エクスターシャよ、その揺れはじきに止まる——おまえの心掛け次第でな」

枢機卿猊下は二人の部下というよりも手下を引き連れて、哀れな罪人（と、すでに決めつけられている）を放置したまま、牢獄舎から立ち去った。

「あうう……きひい……いたい……」

木馬の揺れは次第に小さくはなっていったが、完全には静止しなかった。激痛に身悶えるアクメリン自身が木馬を揺らすからだ。そして。乳首の痛みをやわらげようとして身体を前へ倒すと、会淫を切り裂いていた稜線が、今度は淫裂の奥深くまで食い込んでくる。一時の激痛は我慢して身体全体を前へずらそうと、内腿で力いっぱい木馬を挟みつけて腰

を突き出しても——足に吊るされた鉄球の重みがそれを阻んで、ただ股間を木馬に擦りつけるだけになってしまう。

「いたい……こんなのって……エクスターシャ、これは……ぐううう……あなたがうける……べきなのよ……たすけて、だれか……かみさま！」

神の僕^{しもべ}たる者たちから受けている加虐である。神に救いを求める虚しさに、アクメリンは気づいていない……

.....

.....

.....

——そうして。傷付き汚れてはいても、高窓からこぼれる微かな月明かりに灰白く浮かび上がるアクメリンの裸身は、まだ小さく揺れ続けている。激痛による無意識の身悶えばかりが原因でもない。後ろへ傾いたところで釣り合いが取れるように仕組まれているのだ。すると上体がのけぞって、乳首を引き千切られそうになる。意識するしないに関わらず身体を前傾させて、みずから揺れを増幅しているのだった。

「うあ、あ……く……だれか……た……ひい……たす、け……て……」

揺れ動く鋭利な激痛に、惨めな安息すらも得られないでいる。

そんなアクメリンを恐怖の眼差しで見詰めているのは、檻の中で意識を取り戻したニレナだった。明日は、もしかしたら今夜にも、自分も同じ拷問に掛けられるのだろうかとか怯えているに違いない。自分が受けた拷問と、どちらが苦しいだろうか、とも。

ニレナが、はっと、戸口に目をやった。

ぎいい……と、蝶番を軋ませて扉が開いた。暗闇の中に透かし見える人影は四つ。枢機卿猊下と三人の修行僧に違いない。人影のひとつが壁際へ動いて、小さな赤い光が動いたと見るや、太い焰が灯って牢獄の中が明るくなった。

尋問すなわち拷問の再開——と、ニレナは犬のようにうずくまっている裸身をいっそう縮込ませたが、四つの人影が共にアクメリンのほうへ動いたので、見知らぬ犠牲者の身を案じるどころではなく安堵した。

アクメリンは、うわ言のように激痛を訴えるばかりで、牢獄が明るくなったことにさえ気づいていないようだったが。不意に木馬の揺れが止められて、ゼメキンスに真正面から顔を突き付けられて——しゃっくりのような

悲鳴と共に（幾分かは）正気を取り戻した。

「まだ、おまえはエクスターシャ王女ではないと言い張るつもりかな？」

「あ……いやです。もう……ゆるしてください」

どこまで、ゼメキンスの言葉を理解しているのか。

「おまえが王女と認めたところで、すぐに処刑するわけではないぞ」

ゼメキンスの猫撫で声には、必ず裏があるのだが。

「デチカンまで連行して裁判に掛けたうえで、異端者もしくは魔女であると判定されてから——そうじゃな、裁判はひと月から先になろう。有罪と決まっても、処刑するとは限らん。フィションク準王国の陰謀を赤裸々に証言するなら、教皇聖下より恩赦を賜らんとも限らぬぞ」

それは、およそ実現不能な絵空事に過ぎない。裁判は、被疑者の自白が最有力の証拠となる。完璧な自白が得られるまで、拷問が繰り返されるのだ。陰謀の告発には、それでも足りない。フィションクに対して、この娘が確かに王女であると、これを教皇庁が証明しなければならない。それは不可能に近いし、

仮に本物の王女が証言したとしても、フィションク準国王は愛娘を見捨てても国家の安泰を謀るに決まっている。しかも、夫を捨てて駆け落ちをした妻の娘。一掬の涙すら浮かべないのではなかろうか。そんな私事よりは、メスマンとの同盟を諦めねばならないことのほうが、よほどの打撃だ。

つまりエクスターシャは、フィションクへの教皇庁からの警告の贅として白羽の矢を立てられたというのが、真相であった。などとは、たとえアクメリンの思考が十全に働いていたとしても、思い及ばなかっただろう。

しかし、長時間の拷問（ゼメキンスの見解では、まだ始まってもおらず、とびきりの座に憩わせてやっているだけだろうが、それはともかく）で激痛に疲弊して思考力も失われたアクメリンには、枢機卿猊下の御言葉は福音のように聞こえた。嫌疑を認めさせるための拷問にも思い至らず、馬車なら十日とかからぬ距離をなぜ三十日と見積もるのかも疑問すら浮かばなかった。

「嫌疑に対する尋問は後日のこととしてやろう。今はただ、おのれがエクスターシャであることのみを認めよ。されば、今宵は簡単な検査のみで済ませてやるぞ。どうじゃな？」

「あああ……どうか、もう……おゆるしください」

「認めるのじゃな」

「は、はい……みとめます」

「もっと、明確に証言せよ。おまえは、フィッシュク準王国の第二王女、エクスターシャ・コモニレルなのじゃな？」

「わたしは……えくすたあしや、です」

「王女が、そのような言葉遣いをするものか。正しく言い直せ」

虚ろな瞳の中で、微かに光が揺れた。エクスターシャと入れ替わった直後に、その言葉遣いを訂正させたときのことを、アクメリンはおぼろに思い出した。

「わらわは、ふいしょんくのおうじょ……えくすたあしや、に……そういありませぬ」

アクメリンは、すでに尽きている気力を虚無の中から掘り起こして、枢機卿猊下が望まれているであろう言葉を氣息奄々と口にのぼせ終えると、がくりと首を垂れた。

「三人とも、フィッシュク準王国第二王女の自白を、しかと聞いたな」

三人は左手を胸に当て右手を挙げて頷き、牢獄の入口近くに設えられている小机に置かれている羊皮紙に、アクメリンの自白を書き

込んでそれぞれに署名をした。

ヒロインをそっちのけの猿芝居が終わると、ゼメキンスが次の残虐を命じる。

「売女を降ろしてやれ。この者が悪魔と交わっておらぬか、調べねばならん」

アクメリンは即刻に三角木馬から解放され、後ろ手の枷も外されて――梯子を水平に寝かせた台の上に縛り付けられた。本来の目的に使われるなら足の先が来る位置に腰を置かれて。

「もう……ゆるしてくださる、はずでは……」

「言ったはずじゃ。ごく簡単な検査が残っておると」

「……………」

言われてみれば、そうだったような。

アクメリンはもう、抗議も哀願もしなかった。両手を伸ばして頭の上で縛られようと、首の下に横木を通して、そこへ直角に開かれた両脚を固縛されようと、三角柱の木馬を跨がせられることに比べれば安楽の極みだった。女として最大の羞恥を曝すことなど、肉体的な苦痛は微塵も無い。

枢機卿猊下がいきなり法服を脱ぎ始めても、アクメリンは関心を持たなかった。下着まで脱ぎ捨てて、四十を過ぎてあちこちが弛^{たる}んだ

裸形を見せつけられても、猥下の意図すら推測しようとは思わなかった。とはいえ、その股間に屹立している部分が、ジョイエとニレナの股間に突き立てられた棒状の道具に（かなり小振りだが）酷似しているのに気づくと――さすがに不安が生じた。

アクメリンは上体を屈曲した形で梯子の端に固縛されているから、V字形に開かされた股間は宙に突き出ている。その正面――ただ前へ進むだけで容易に挿入可能な位置に、ゼメキンスが立った。

「おまえが清らかな身体であれば、その門は閉ざされており、男の侵入を拒むであろう。されど悪魔と交わっておる魔女なれば、悦んで迎え挿れるはずじゃ」

検査の後には確実に処女でなくなるという、冤罪捏造のための処女検査であった。

しかしアクメリンは、これから我が身に起こる災厄を、正確には理解していない。結婚適齢期になった娘でさえも、新婚初夜は夫となった男に一切を委ねて、羞ずかしくても痛くても我慢しなさい――としか教わらないのが、少なくとも貴族の世界では普通だった。わずかな聞きかじりと、今夜に目撃した惨劇だけが、アクメリンが性に関して知っている

すべてだった。いや、目撃した陵辱と男女の営みとを直接に関連付けて理解しているのかさえ怪しい。

しかし、肉体の反応は知識とは無関係である。棒状の道具に酷似した男性の器官を股間に押し挿れられて、当然に痛みを感じた。とはいえ、三角木馬に股間を挟られていたときの痛みに比べれば、呻き声にすらも値しない軽微なものだった。

それよりも。これは、まさしく新妻が夫に従属するための儀式なのではないか——と、そのことに思い至って愕然とした。

「いやっ……やめてください。お嫁に行けなくなります！」

魔女として焚刑に処される瀬戸際に立たされているというのに呑気な心配をするものではあるが。ようやく四肢の指に足ろうとしている年齢の乙女にとって、実感を伴って死を恐怖できるはずもなく、むしろ、神にも両親にも祝福された結婚が叶わなくなることのほうが、よほど切実な問題だった。

王女として（父王に疎まれながらも）乳母日傘で育ちながら、速やかに海賊相手の娼婦という逆境に順応し、アクメリンが拉致されたと知るや敢然と行動を起こしたエクスター

シャと比べれば、アクメリンは篡奪などという大それた悪事をしてのけながら、あまりにも凡庸な娘ではある。

贅娘の哀願にゼメキンスはいっそう男根を怒張させて、腰をぐいと突き出した。

「ぎひっ……」

さすがにアクメリンは呻いたが、女にとって生涯一度きりの惨事（過半の女にとっては慶事）に際するにしては、あまりに控えめな声だった。それだけ、直前までの拷虐が苛酷という証左ではあるが。

苦痛の表現は控えめであっても、指一本挿れたことのない処女穴の締め付けは、繰り返し実父に犯されてきた少女や夫の魔羅に馴染んだ新妻とは比較にならなかった。これまで数多の女信者に秘蹟ならぬ卑跡を授け、五指に満たぬとはいえ悪魔としか交わったことのない若き魔女の正体を暴いてきた百戦錬磨の枢機卿猊下も、聖なる書物の半頁も読まぬうちに検査を終えてしまった。あるいは、いずれにせよ単純に突っ込むだけの検査には熱意を持てず、工夫を凝らした尋問こそが天職と心得ているのかもしれない。

「すんなりと挿入できたうえに、新たな出血も確認できなんだ。この者は魔女と断定して

よかろう」

魔女であれば、エクスターシャであろうとアクメリンであろうと、異教徒と通じていようといまいと、焚刑の運命は免れないのだが。アクメリンの耳にゼメキンスの言葉は届いていない。じゅうぶんな予兆があったにも関わらず、彼女にとっては唐突だった処女喪失の衝撃に呆然としている。

当人に代わって、意外にもガイアスが弁護にまわった。

「破瓜の痛みは、人によって大きな差異があると聞き及びます。苦痛を訴えなかったからといって、悪魔と交わっていたとは断言できないのではないのでしょうか。また、破瓜の血はそれ以前の怪我による出血に紛れていたのかもしれない」

アクメリンはガイアスの言葉もじゅうぶんには理解できないままだったが、とにかく庇ってくれているらしいとは分かった。そういえば――投獄された直後に身体を清めてくれたときも、彼の手つきは優しかった。この三日間、私を虐め抜いてきたホナーやリカードとは違うのかもしれない。

アクメリンの見立ては、ある意味間違っ
てはいない。ガイアスは、他の二人よりも枢機

卿猊下の信認が篤い。だからこそ、後方支援の意味でマライボに留まりながら、ゼメキンスのために魔女嫌疑者を強引に摘発していたのだ。

「ふうむ。汝の言い分にも一理はあるのう。では、魔女詮議は後日のことと致すか」

アクメリンは、ひっそりとガイアスに感謝したのだが。裏を返せば、拷問が増えるのだから、恨むべきである。もっとも実際には……どのみち、ゼメキンスが飽きるまで拷問は続く。そして、熱心な神の使途である彼が職務に倦むことなど無いのだった。

「しかし、まだ検査する穴が残っているのではありませんか？」

ホナーが口を挟む。

「それも明日じゃ。余の杭は鉄で出来ておるわけではない」

つまり——処女穴よりもきつい尻穴を貫くのは、二発目では難しいという意味である。

「とはいえ、まだまだ、汝らに初手を任せる年齢ではないわい」

蛮族に喩えるなら『族長の権利』であろう。

ともあれ。アクメリンは梯子の寝台（拷問台であろう）に固縛されたまま、血を洗い流され檻褌布で拭かれ、錬金術の秘薬と称する

軟膏を股間に塗りこめられて——ジョイエが入れられていた狭い檻に押し込められた。そして。水も食餌も与えられることなく、翌日まで放置されたのだった。

——アクメリンもニレナも、互いに口を利くどころか、目を合わそうともしない。闇を透かし見ても、そこにあるのは惨めな自分の鏡写し。そして、励まし合おうにもその取っ掛かりがない。ふたりに共通しているのは、容疑を認めるまで拷問を繰り返されて、その行き着く先は極刑。ひたすら、おのれの痛みに沈潜するしかないではないか。

それでも、まったくの孤独よりはましだったかもしれない。すくなくともニレナにとっては、アクメリンの所作に扶けられるところもあった。生理的欲求である。すでにアクメリンは、垂れ流すことに（羞恥は覚えながらも）狎れてしまっていた。犬のようにうずくまったまま、もちろん片脚を上げたりはせずに、石床に水溜りを作ったのだ。その微かな水音を聞いて——ニレナも、下腹部の我慢しきれない不快を軽くできた。

まんじりともせず朝を迎えた——のは、ニレナだけだった。身体のだこにも縄を掛け

られず、狭い檻であっても寝返りくらいはできるし。股間の内も外も痛みに疼きながらも、アクメリンは三日ぶりに熟睡できたのだった。

夜が明けきった頃、ガイアスがひとりで牢獄を訪れて、食事を差し入れてくれた。薄い肉汁を容れた皿と、黒くて固い麵包を乗せた板。最下層の貧民に教会が施すような代物で、ニレナは麵包をひと口かじっただけで顔をしかめたが――アクメリンにとっては、アルイェットから連れ去られて以来の、他人の咀嚼物ではない、まっとうな食事だった。

うずくまったまま、両手で麵包をつかんでかぶりつく、その浅ましい姿を、ニレナは呆れた顔で眺めていた。この女が、どこかの国のお姫様だなんて、そんな馬鹿な。当人が主張していた侍女ですらあり得ない。まるで女乞食そのもの――ニレナの表情は、そう語っていた。

陽が天に沖するすこし前になって、今度は四人が一緒になって牢獄を訪れた。アクメリンとニレナが恐れていた尋問の再開――では、あったのだが。

最初にニレナが檻から引き出されて。両手で前を隠して身体を縮込めている彼女の前に、古着が投げられた。

驚きの表情を浮かべるニレナ。彼女自身の替着だったからだ。それが、なぜここにあるのか。夫が差し入れてくれたのだろうか——思わず扉を振り返ったが、閉ざされたそこに夫の姿があらうはずもない。

「おまえは釈放する。ガカーリイ商会が告発を取り下げた」

ニレナは一瞬ぽかんとして。たちまちに安堵が顔一面に広がった。

「は、はい……ありがとうございます」

身をこごめて衣服を拾い上げ、今さらに男性の目に裸身を曝すのを羞ずかしがるかのように、あたふたと身繕いを調えた。昨日の鞭打ちと陵辱、ひと晩じゅうの窮屈な姿勢での監禁。それらによる疲弊が一時^{いちどき}に吹き飛んだかのような身の動きだった。

「されど、魔女の嫌疑が晴れたわけではないぞ」

ゼメキンスが釘を——刺さねば、格好がつかない。

「監視を緩めぬよう、この地の司祭にもガカーリイ商会の面々にも申しつけておいた。再度の告発があれば、次は夫婦共々ということにもなろうぞ」

ニレナが、はっと顔を上げて枢機卿猊下を

直視して。すぐに俯いて唇を噛んだ。

「……夫にも、そのように伝えますです」

監視者の名に商会を加え、次は夫も告発されると脅す。つまり、今回の告発は、夫のワイマーツを商会の支配下に置くための脅迫だったと——明白に語られたも同然だった。

まったくの茶番劇。しかし、それをいえば——たとえ捕らえた娘が真性のエクスターシャだとしても、フィシヨンク準国王を弾劾することは困難と分かりながら、その娘を処刑する。こちらのほうが、よほど大掛かりな茶番劇であろう。アクメリンの訴えに真実を見ながら、亡き者となったエクスターシャに仕立て上げようとするなら、二重の茶番劇でもある。

小さいほうの茶番劇は、ガイアスがニレナを牢獄から連れ去ることで幕を閉じた。そして、壮大な茶番劇の第二幕が開く。

「この者は、おのれが王女エクスターシャであると認めた。そのうえで自白させねばならぬことは多々あるが、それよりも先に——この者が魔女であるか否かを確定させねばなるまい」

その言葉を聞いてアクメリンは、昨夜にされたこととされなかったこと。ニレナがされ

たことなどを思い合わせて、尻穴を犯されるのか股間の突起に針を刺されるのかと、生きた心地も無い。

しかし、ゼメキンスの一言一句にたいして意味がないことをアクメリンは分かっている。ゼメキンスの言葉は、被疑者をおのれの好きなように罵るための場当たりでしかないのだ。昨夜はニレナを魔女と断定しておきながら、今日になると告発が取り下げられたと言って釈放する。

アクメリンの扱いは、さらに恣意的である。魔女は鎖で縛って水に放りこんでも浮かび上がると称して験した結果は当然の失敗に終わったが、次には悪魔から授かった淫茎を暴いて九分九厘は魔女であると断定した。それでも昨日は、悪魔と交わった証拠を確かめるという名目でアクメリンを犯し――拷問に比べれば小さい破瓜の痛みに耐えたから処女ではないと決めつけ、破瓜の血は三角木馬による出血に紛らせてしまった。

次に何をどのように確かめるにしても、否定的な結果が出ればさらなる検証を、そうでもなくてもさらに証拠を固める必要を言い出すであろうとは、容易に推察――できないのは、アクメリンばかりである。

「とはいえ、すぐには調べられぬな」

とは言いながら、二人の修道僧にアクメリンを檻から引き出させる。

「この者は、一昨日からこっち、腹に汚物を溜め込んでおる。まずは、その処置じゃ」

男の人が見ている前で排泄をさせられるのだろうか、アクメリンは^{おぞけ}怖気をふるった。放尿は生理的欲求が羞恥を上まわってしまったけれど、こちらのほうは、まだ一日や二日なら我慢できる。それを無理強いされるのは、女として耐えられることではない。けれど拒めば、また鞭打たれるか三角木馬に寄せられるか、それとも針による検査をニレナよりも厳しくされるかもしれない。

しかしゼメキンスは、言葉あるいは暴力による無理強いはしなかった。昨夜はジョイエに使われた大きな木枷が持ち出された。

アクメリンは膝を折って座らされて、額が石床に着くまで上体を屈曲させられた。手を後ろへ引かれて、木枷に穿たれた五つの穴の外側へ通された。その内側へは足首。真ん中のいちばん大きな穴は、ふつうに座らせた形で拘束するときには首を通すのだが、今は用がない。

「ホナー、持って来ておるな」

マライボの牢獄には、囚人に苦痛を与える道具は揃っているが、女囚の羞恥を煽るための道具には乏しい。それだけ、この都市の統治者は真っ当な男であるということだが。いっぽうのゼメキンスは、そちらに特化した拷問具を荷馬車に幾箱も積み込んでいる。男に比べて女のほうがいっそう罪深い（アダムに林檎を勧めたのはイヴである）から、女への拷問具にも工夫を凝らすのは神の使いとして当然の職務である。などという皮肉はさて置き。

ホナーが、馬車から持って来ている箱から取り出したのは、二の腕ほどの太さと長さの金属筒だった。一端には細長い嘴管があり、反対側には押し引き出来る把手が付いている。それを、いったんは檻の上に置く。

床に窮屈な俯せの姿勢で転がされているアクメリンの前に小さな桶が置かれた。ゼメキンスが法服をたくしあげ細袴をずらして、桶に向かって放尿する。

「わっ……」

アクメリンは飛沫を顔に浴びて、しかし反対側へ向くことも容易ではない。

ゼメキンスに続いてホナーとリカードが、これは桶の左右から放尿する。アクメリンが

顔をそむけても、どちらかひとりが動いて、飛沫を浴びせかける。

三人ともこの為溜めていたらしく、かなりの量になった。それをホナーが金属筒に吸い上げた。アクメリンの後ろへまわって、無防備に曝されている尻穴に嘴管を突き刺した。「痛いっ……ああ、いやあ！」

嘴管で貫かれる（すでに苦痛に狎らされているアクメリンにとっては）わずかな痛みよりも。それに続いて、腹の中に押し入ってくる汚水の感触に、アクメリンは狂乱した。男の小便——正体が分かっているだけに、全身が総毛立つ。

しかし、事は汚辱だけでは済まない。腹の中には三日分が溜まっている。それが水で軟らかくなり、溜まっていた分量に数倍する水の圧迫と相俟って。数分もすると、凄まじい便意が募ってきた。

「く……お慈悲です。この枷を外して……ここから出してください」

註記でも述べたように、この時代の人々には戸外での排泄に（誰にも見られないのなら）羞恥はない。アクメリンの懇願を現代風に翻訳すれば「トイレに行かせてください」となる。

ゼメキンスは何も答えない。隠しから小さな砂時計を出して、アクメリンの横に置いた。「負けたほうが、呪いをふさぐのじゃ。良いな」

「では、三回を超えるほうへ」

リカードが応じて、ホナーが肩をすくめる。「となると、拙僧は三回以内ですか。にしては、ちと量が少なかったかもしれませんな」

およそ意味不明の遣り取りだが、これで意思の疎通ができているのだから——こういった処置には慣れているということであろう。

「く……くうう……」

哀願は無駄と悟って、アクメリンはひたすら便意に耐えている。

「……一回」

砂の落ち切った砂時計を、ゼメキンスがひっくり返した。再び砂が落ち始める。

季節は初夏であるが、石壁が熱を遮っているので、牢獄の中は風通しが悪いわりには蒸し暑くない。しかし、アクメリンの全身には汗がびっしり噴いている。

「……二回」

数えながらゼメキンスが再度砂時計をひっくり返したとき。

「あああっ……もう、だめえっ！」

アクメリンは悲痛な声で叫ぶなり。

ぶじゃああ、ぶりりりり……

茶色に濁った水を激しく噴出させ、軟らかくなった固形物もぼとぼと落とす。

「あああっ……いやあ、見ないで！」

アクメリンは啜り泣きながら、しかし、排便はなかなか終わらない。

ホナーとリカードが、牢獄の隅に置かれた大桶から水を汲んできては、アクメリンの尻といわず全身にぶっ掛ける。石床にはわずかな傾斜が付けられているので水は一方へ流れて、壁に穿たれた排水孔へ吸い込まれる。

汚れが洗い流されると。今度は水を浣腸器に吸って、アクメリンに注入する。しかも、続けざまに三度。もはやアクメリンには前にも倍する圧迫に抗する気力は残っておらず、すぐに水を噴き上げる。そして、また何杯も水を全身に浴びせられて、ゼメキンスの言う処置は終わった。

蛙が潰れたような格好で床に転がされているアクメリンを、二人の修道僧が前後から抱え上げて、梯子を水平に寝かせた拷問台に直交させて載せる。アクメリンの尻と頭が梯子の枠から突き出た。その後ろにゼメキンスが、前にはホナーが立ちはだかる。アクメリンは

ぐしょ濡れのままなので、服を汚すのを嫌ってか、二人とも全裸になって――十字架だけを胸に吊るしているのは、むしろ戯画でしかない。

ホナーは全身が引き締まっている。修道僧の質素な食事と日常の労働とを反映してであるなら、そういつもいつも破戒に明け暮れているわけでもなさそうだ。ゼメキンスも、年齢と高位の役職相応に弛んではいるものの、それでも肥満や衰えとは程遠い。なによりも、男の根源たる部分は、太さも角度もホナーに勝るとも劣らない。

ホナーが、急峻にそそり立っている怒張をアクメリンの唇に近づけた。

「呪いの言葉を吐かれてはたまらん。その棒で口をふさいでおれ」

と、ゼメキンスに言われても。従えるはずもない。アクメリンは歯を噛んで口を閉ざし、そっぽを向く。

ホナーが縄で輪を作ってアクメリンの首に通した。頭を押さえつけて下を向かせ、縄の端を引いて首を絞める。

「あぐ……」

息苦しさを感じるより先に首の痛みにアクメリンが喘ぐ。

その薄く開かれた口にホナーが怒張を突き挿れる。

「むぶ……ぶふっ……！」

あわてて吐き出そうとするアクメリンだが、頭を押さえられ下から突き上げられていては、どうにもならない。いっそう深く突き挿れられて、ホナーの淫毛が鼻腔を刺激して。

「びいっくしゅん！」

とたんに、また首を絞められた。

「噛むな。次に歯を立てたら、このまま縊り殺すぞ」

低い声でホナーに脅されて、アクメリンは意識して口を開けた。

「しっかり咥えているろ」

縄は緩められたが、両手で頬を叩かれた。アクメリンはまた口を閉じた。

「今のところは、それで良い」

呪いの言葉を封じ終わると、ゼメキンスが腰をつかんで、怒張を尻の谷間にあてがう。

「んむうう……」

やはり――ニレナへの仕打ちを見ているだけに、何をされようとしているかは、昨夜に処女を破られたばかりの娘にも容易に理解できた。だけであって、とうてい受け容れることはできない。

「あええ……おんあおお……」

ぎゅっと首を絞められて、アクメリンの言葉が途切れる。

「この期に及んで逆らうか。ならば、終油の秘蹟は授けてやらんぞ」

終油の秘蹟とは、死に瀕した者の額と手に聖油を塗る儀式を謂うが、この場では潤滑にそれを使うつもり——だったのかもしれない。ゼメキンスは、わずかに水で湿されているだけの尻穴に、怒張を突き挿れた。

処女穴を貫通されたときよりずっと重たく熱い激痛がアクメリンの尻穴を引き裂いた。

「む`ひ`い`い`い`い`っ……！」

くぐもった悲鳴とともに歯を食い縛ったのは一瞬。顎をつかまれて力が緩んだ。

ぐにゅんぐにゅんぐにゅんと、尻で激痛がうねる。と同時に。口の中でも怒張が前後に衝き動き始めた。

「むびいい……んぶっ、んぶっ……」

尻の痛みと喉元に込み上げる吐き気と。アクメリンは、生きた心地もない。

「ううむ。悪魔と交わったにしては、こなれておらん。具合がよろしくない」

「そのようで。呪文を唱える気配もありません」

「ふむ……もしや、いまだ悪魔と契約を交わしてはおらぬのかな」

勝手なことを言い交わしながら、ゼメキンスとホナーは、腰を動かし続ける。

「とはいえ。この者に悪魔の淫茎が芽生えておることも事実じゃ」

「では、どのように」

「左様……」

ゼメキンスは猿芝居をやめ、いっそう激しく腰を打ちつけて、数分で埒を明けた。

ほとんど同時にホナーもアクメリンの口の中に白濁を放った。

「うぶっ……」

ホナーは男根を引き抜くと、素早くアクメリンの口を掌でふさぐ。

「んむうう……」

「神に祝福された聖なる汁だぞ。呑み込め。体内に潜む悪魔を滅ぼしてやる」

鼻までつままれて、なおも逆らえば窒息してしまう。アクメリンは吐き気に逆らって、口中の汚濁を嚥下するしかなかった。

それを見届けてから、ゼメキンスも腰を引いた。梯子を向こうへまわって、放心しているアクメリンの唇に、萎えかけた男根を触れさせた。

「余からも清めの汁を授けてつかわす」

ひとたび崩された城壁は、すぐには修復できない。アクメリンは言われるがままに口を開けて、たった今まで自身の尻穴に突き立てられていた肉の杭を咥えた。

ゼメキンスがちょっと考え込んだのは——文字通りに吸茎させてくれようかと思案したからだろう。しかし、アクメリンの様子から困難と判断したらしく、すぐに引き抜いて、残っている汚れは頬になすりつけて事足れりとした。彼の心は、すでに次の責めに向かっている。

「この女ひとりの魔女詮議もさることながら、フィションクが国を挙げて神の教えに背いたという証言を得るのが最重要じゃ。これ以上は悪魔と交われぬよう、この者の肉体に結界を張っておくとしよう」

ゼメキンスの指図で、アクメリンはいったん木枷を外されて、梯子の上に仰臥させられた。両手は頭上でひと括りにされて、梯子の端にある巻取機に縄でつながれる。木枷の内側の穴が梯子の外枠を挟み込み、アクメリンの両脚は外側の穴に嵌められた。巻取機で、アクメリンの全身が伸ばされる。拷問であれば、ここからさらに身体を引き伸ばしていく

のだが、そうはしなかった。

ホナーがアクメリンの腰をつかんで尻を梯子から浮かさせ、リカードが短い丸太をその隙間に押し込む。腰を思い切り天井に向かって突き出した形にアクメリンを固めておいて、ゼメキンスが言うところの結界を張る準備が始められた。

火桶に薪を燃やし石炭を乗せて、白熱するまでふいごで風を送る。そうして、先端に小指を組み合わせたほどの十字架を鍛接した鉄棒を火桶で灼熱させる。

アクメリンは、その様子を恐怖と懷疑が入り混じった目で眺めていた。どう考えても、その鉄棒は自分の身体に押し付けるために準備されているとしか思えない。けれど、そんな残酷なことを、神に仕える人たちがするだろうか。

ゼメキンスが鉄棒を火桶から引き抜いて近づくと、懷疑は吹き飛んで恐怖が膨れ上がる。

ゼメキンスは灼熱した十字架をアクメリンの下腹部すれすれに近づけて、脅すように焦らすように宙を滑らせていく。熱で淫毛がぱっと燃え上がる。

「お、お赦してください……それだけは……他のことなら……鞭でも針でも……」

鞭にしても針にしても、どれだけひどく傷付けられようと、いずれは元に復する（と、アクメリンは思っている）。けれど、焼印は死んでさえ肌に残る。家畜と同じ、あるいは重罪人や逃亡奴隷。そんな烙印を刻まれては、まともな結婚どころか野合すら望めなくなる。処刑台の上で短い生涯を終える運命を、どこか実感していない彼女には、まさしく死にもまさる恐怖だった。

下腹部を焼け野原と化さしめてから、ゼメキンスは鉄棒を垂直に立てて、すでに黒くなっている十字架をアクメリンに押し付けた。

じゅうっ……

「いゝきゝゃあゝあゝあゝあゝあゝっ……！！」

絶叫の中に白い煙が立ちのぼり、肉を焼く臭いが周囲に広がった。上下逆さになった十字架の頭部が淫核の包皮を掠めて、厚みの半分ほども肌にめり込んで——そのまま数秒も留まってから、引き剥がされた。

錬金術の秘薬と称する、効き目は怪しいが高価な油が火傷に注がれ、さらに半固形の脂が塗られて、その上を油紙が覆った。焼印の形が崩れぬように、かつ早く固定するようにという処置であった。火傷がある程度は落ち着かないと、そこを鞭打つことはできないし、

女の罪業の根源を検査するときにも不都合がある。さらに、ゼメキンスには別の思惑もあるのだが、それは数日後に明らかとなるので、今は詳述しない。

「今日は、これまでじゃな。本格的な尋問は、明日からとする」

拷問台の上にアクメリンを磔けたまま、ゼメキンスは二人の手下を従えて牢獄から立ち去った。

「うっ……うっ……」

扉が鎖されてすぐに、アクメリンの口から嗚咽が漏れ出した。

「どうして……どうして、こんなことに……」

彼女自身にも分かっている。すべては、おのれ自身の浅はかな企みが招いた事態なのだ。それでも、運命を呪わずにはいられない。三日前に捕らわれてから初めて、アクメリンは独りにされた。立哨の兵もいなければ、共に捕らわれている囚人もいない。侍女とはいえ、貴族の娘——という自負も、平民に見られているという意識があつてこそ。

しかも。肌に、それも致命的な部位に焼印を刻まれて、女としての平凡な日常を取り戻せる万にひとつの希望さえ失われた。

嗚咽はいつまでも続き、アクメリンの顔は

あふれる涙でおおわれていった。

——もはや時の移ろいになどアクメリンは気を留めていなかったけれど。夕暮れ時でもあったろうか。牢獄の扉が軋みながら開く。

ぷるんと、それでも気丈に涙を振り払って、逆光の中に浮かぶ人影に目を凝らす。ガイアスだった。

ほっと安堵の息を漏らすアクメリン。この男もゼメキンスの手下には違いないが、彼だけは幾分でも優しく扱ってくれる。今も、手にしているのはアクメリンのための夕食だろう。

「猊下のお達しで、縄をほどいてはやれぬ」

それでも、巻取器の把手を巻き戻して縄を緩め、下から肩に手を入れて上体を斜めに起こしてくれた。

アクメリンは頭をいっぱいにもたげて、唇にあてがわれた木椀の中身を啜った。具のない肉汁にも、滋養が全身に巡る思いだった。

硬い麵包を千切って口に入れてやってから、ガイアスは、アクメリンの下腹部をわずかに包んでいる油紙をめくった。半固形の脂は人肌の温もりに溶けて、焼印でへこんだ傷口を埋めていた。

「悪魔と交われぬように結界を張ったと猊下

はおっしやっていたが、乙女の柔肌を斯様に傷付けるとは……」

ガイアスは絶句——にしては長過ぎる台詞を口にした。

「猥下のなさり様は強引に過ぎる。昨夜、そなたは自身がエクスターシャ王女であると認めたが、あれとても拷問から逃れようとして、ついた嘘ではないのか。そなたは、^{まこと}真は侍女のアクメリンではないのか？」

優しく囁かれて、それが毘かもしれないと疑うなど、今のアクメリンには到底できなかった。

「は、はい……ガイアス様は分かってくださるのですね」

「やはり、そうか。そなたは、アクメリン・リョナルデなのだな」

「そうです。私は取るに足りない侍女でございます。どうか、枢機卿猥下にお口添えください」

一縷の希望を取り戻したアクメリンに背を向け、ガイアスは扉に向かって呼ばわった。

「猥下の見抜かれた通りです。この女は、簡単に自白を翻しました」

ガイアスが扉を閉じていなかった出入口から、雪崩れ込むと形容したくなる勢いで、三

人の加虐者がアクメリンの周囲に殺到した。

「え……？！ あ、あの……」

ガイアスまで含めて三人の修道僧が、アクメリンの木枷を外し縄をほどいて、拷問台から引きずり下ろした。何が起きているのか理解できず、しかしこれまで以上に乱暴に扱われて、アクメリンは恐慌に陥る。

アクメリンの右足首に鎖が巻かれて、片脚で宙吊りにされた。頭上に垂らした腕を背中へまわされ、腰のあたりまで引き上げられて、縄で手首を嚴重に縛られた。その縄に、昨夜は足首に吊るされていた、人の頭ほどの鉄球がつながれた。鉄球の重みで腕は肩の高さまで引き下げられたが、縄の固縛に阻まれて腕をねじれないので、そこからは下へ動かない。

アクメリンの裸身が持ち上げられて横へ動かされ、先端がY字形に分かれた木の棒で鎖も押しやられて、水を湛えた大桶の真上にある滑車に掛けられた。鎖の端が壁の留金から外されて、ホナーとリカルドの手に握られる。「下ろせ」

ゼメキンスの指図で、アクメリンの逆吊りの裸身がゆっくりと下ろされていき——ついに、顔が水中に没した。直角に突き出ている腕が大桶の縁につかえて、そこでいったんは

止まったのだが。ガイアスが鉄球を持ち上げると、腕は身体の重みを支えられずに、頭が底に着くまで沈んだ。

大桶は大人ふたりが腕を広げても囲めない大きさで高さも腰を越えている。貯水だけでなく水責めをも考慮した大きさだった。

魔女は水に浮くと称して、鎖で縛られて川に沈められた経験が、アクメリンに咄嗟の対応を取らせていた。大きく息を吸い込んで、額が水に触れたときには息を止めていた。しかし、それで持ち堪えられるのは、一分かそこら。しかも、逆吊りにされているので鼻の穴に水が押し入ってくる。むせそうになって、ぶくぶくと鼻からわずかずつ息を吐く。

たちまち息が苦しくなって、頭が割れるように痛み、目の前に赤い霞がかかってくる。しかし、水中で息を吸ったときの苦しみも知っているので、アクメリンは懸命に堪える。堪えながら、なぜこんな責めを受けているのか、どうすれば赦してもらえるのかを、考える——のだけれど、恐慌に陥った頭では考えをまとめられない。考えつくのは、我が身はデチカンまで押送されて、そこで裁判に掛けられてから処刑されるはず——この場では殺されないはずだという、惨めであやふやな希

望（？）でしかない。

水中に没して一分、いや二分は耐えただろうか。アクメリンはついに限界に達して、ごぼごぼっと激しく泡を吐いた。間髪を入れずに引き上げられた。

「はあ、はあ、はあ……」

さいわいに水は呑んでおらず、荒い息だけを繰り返すアクメリン。

ガイアスが優しさを装った声で尋ねる。

「アクメリン、大事ないか？」

「はい……」

うかと答えてしまった刹那。ちゃらららっと鎖が音を立てて、アクメリンは水中に落とされた。

不意打ちに息を溜める暇もなかった。大桶の縁に当たった腕が痛い。

今度はすぐに引き上げられたが。

「げぼほっ……げふっ」

吸い込んでしまった水を吐いて咳き込んだ。

「おまえは、アクメリンじゃな？」

今度はゼメキンスに尋ねられて、ようやくアクメリンは失策に気づいた。

「私は……エクスターシャです」

「馬鹿め。王女がそのような言葉遣いをするものか」

がららっ、ざぶん。

また水を吸わされて、引き上げられた。

「わらわは、エクスターシャ・コモニレルじゃ。お慈悲ですから、もう赦してください」

それでも、ゼメキンスは満足しない。

「ずいぶんと卑屈じゃの。とても一国の姫君とは思えぬわ」

今度は高く吊り上げてられてから、じわじわと下ろされていく。

「待ってください。わらわは、本当にエクスターシャなのです」

鎖は止まらない。アクメリンは諦めて、深呼吸を繰り返して――肩が浸かるところまで沈められた。

どう答えれば、ゼメキンスを満足させられるのだろうか。すぐに泡を噴いたら引き上げてはもらえないだろうか。そんなことを思い悩む暇もなかった。

ばちいん！

乳房に鋭く太い激痛が奔って、悲鳴が泡になって弾けた。

ばちいん！

ばちいん！

さらに二発を続けざまに食らって。

ばちいん！

息を吐き切ったところに四発目を食らった。
反射的に息を吸ってしまい、胸が灼けつく
ように痛んだ。

ところが、それでも引き上げてもらえない。
びくんびくんと全身に痙攣が奔って——意識
が薄れかけてから、ようやく赦された。

「おまえは、アクメリン・リョナルデじゃな」
鞭をアクメリンの目の前でしごきながら、
ゼメキンスの意地悪い問い掛け。

アクメリンは破れかぶれで、息も絶え絶え
に叫んだ。

「違う。わらわは、エクスターシャ・コモニ
レル……フィションク準王国の……第二王女
じゃ。このような……辱しめを受ける謂われ
はない！」

ゼメキンスが、狡そうに破顔する。しかし、
鎖を握る二人に頷くと、またしてもアクメリ
ンは水面へと下ろされていく。

そして今度は、尻への滅多打ちが十を数え
た。乳房ほどの爆発的な激痛ではなかったの
で、アクメリンはどうにか悲鳴を堪えた。そ
れでも、鞭打たれるたびに少しずつ泡を噴い
て、やはり溺れる寸前に引き上げられた。

「正直に言え。おまえはエクスターシャの侍
女、アクメリン・リョナルデであろう」

どう答えても、赦されそうにはない。

枢機卿猊下は、捕らえた女が王女でないと困るはずだ。アクメリンは、闇夜に目隠しをされたような意識の中で、かろうじてその結論を見出した。

「……わらわは、エクスターシャ・コモニレルじゃ」

またしてもゆっくりと水に浸けられて、今度は後ろから尻の割れ目越しに股間を鞭打たれた。座るような形で曲げられていたアクメリンの左脚が、びくんっと跳ねて、太腿で股間を庇うように内側へ曲げられた。

アクメリンは内腿を引き締めて、脚を閉じ続ける。

鞭は焉んで、しかし引き上げられる気配もない。息が苦しくなって、そちらへ注意が移り、脚の力が緩むと――ばちいん！

より強烈な一撃を股間に叩き込まれて、大桶の水面で大量の泡が弾ける。

それで、ようやく引き上げられて。

「おまえは、アクメリン・リョナルデであろう」

同じ質問が繰り返される。

エクスターシャだと答えると水に浸けられて鞭打たれるのだからと――アクメリンは、

わずかに残っていた理性が導いた結論を変えてしまった。

「……私は、アクメ、きゃあっ！」

言い終えないうちに、一気に落とされた。大桶の縁に腕が当たって痛みが奔ったが、それどころではない。したたかに水を吸い込んでしまい、アクメリンは水中で苦悶する。

ゼメキンスたちの目には、断末魔の痙攣と映る。それでも、すぐには引き上げない。痙攣が小刻みになり、あと一分もすれば確実に溺れ死んでしまう瀬戸際まで追い込んでから、ようやく引き上げてやる。

アクメリンを石床に俯せに転がし、ガイアスが背中を足で踏んで強く圧迫する。意識を失ったままのアクメリンが口から水を吐いた。二度三度と繰り返してから仰向けにして上体を引き起こし、背後から腕をつかんで背中に膝頭を当てて、ぐいぐいと押す。

「げふっ……かはっ、げふっ……」

アクメリンは蘇生した。この手際の良さからも、四人の聖職者が拷問術に長けているのが見て取れるであろう。

「こうも易々と水に溺れるとは——おまえは魔女ではないのかも知れぬ。それとも、結界の効果であろうか。おまえはどう思うかな、

アクメリン？」

ぴくっと身体は反応したが、アクメリンは答えない。

「アクメリン、おまえに問うておるのだぞ」

「……わらわの侍女は、ここにはおらぬ」

ゼメキンスは、驚いたことに、床にへたり込んでいるアクメリンの頭を優しく撫でた。

「それで良いぞ、アクメリン」

「くどい！」

氣力を振り絞っての演技がゼメキンスを満足させたことに安堵しながら、やり過ぎたらかえって怒らせるのではないかと内心で怯えながら、アクメリンはさらに演技を続ける。

「わらわはエクスターシャじゃ。王女たるわらわの肌に、たとえ枢機卿猊下といえども、みだりに触れるのは無礼であろう」

「おお、これは失礼致した」

アクメリンに付き合って、ゼメキンスが恐縮の態で手を引っ込めた。

「王女殿下はお疲れのご様子じゃ。臥所^{ふしど}にお連れ申せ」

臥所とは、四つん這いでうずくまるしかできない狭い檻——ではなく、手足を存分に（強制的に）伸ばせる、水平に寝かされた梯子の拷問台だった。もっともゼメキンスには、さ

らなる拷責を加える意図はなかったらしい。アクメリンが火傷に触れられぬようにして、綺麗な十字架の形を崩さず早く治癒するようという配慮だった。だから、アクメリンの四肢を無理に引き伸ばしたりはせず、たとえば言うなら、昨日から使っている鉄球を二つとも足から吊るして両手で木の枝にぶら下がっているくらいの張りで、巻取器は止めたのだった。

そのままアクメリンは放置されて、一日が終わった。夕食は与えられなかったも同然だが、それをつらく思うというのは――火傷にしても溺れかけて傷付いた肺臓の痛みにしても、その程度だったということでもあった。

この三日間で心身ともに傷付き疲れ果てていたアクメリンは、泥のように眠った。背中と尻に食い込む梯子の横棧も、羽毛を詰めた布団とたいして違わなかった。

そうして迎えた、マライボでの三日目。驚いたことに、アクメリンは一切の拷問を受けなかった。午前中は釘を植えてない肘掛椅子に座らされて四肢を革帯で拘束され、午後は四つ葉の白詰草のような形の枷で逆海老に拘束されて牢獄の隅に転がされていた――のを拷問と呼ばなければ、だが。

静謐なままに一日が過ぎた。牢獄に出入りするのには三人の修道僧だけ。新たに犯罪者が投獄されることもなかった。

それは当然のことではあった。アクメリンは街並みの規模さえ知らないが、フィシヨンの都市と大差なければ住民の数は三千から五千くらいだろう。一年の間には百人に一人が処罰されるほどの罪を犯すとしても、街全体で五十人。摘発と同時に処罰される者が多いから、投獄されて厳しく尋問されるのは、年に十人もいるかどうか。それよりは、すでにアクメリンも目撃したように――権力者の意に従わぬ者に無実の罪を着せて拷問に掛けると脅し（あるいは実行し）て屈服させるといった例のほうが多いのではないだろうか。とは、男爵令嬢あるいは王女付きの侍女であった頃には想像もできなかった現実……なのである。

翌日もゼメキンスは牢獄に姿を見せず、したがってアクメリンは（十字架を背負わされて追い立てられたり立木に縛り付けられて夜を過ごすよりは）安逸に一日を過ごせた。

そうなると、さまざまにおのれの未来を予測して、発狂寸前に追い込まれる。十の未来を思い描けば、その内の七は焚刑。一は罪一

等を減じられて磔刑か斬首。あるいは拷問で責め殺されるか、道中で力尽きて野垂れ死にか。一年後いや半年後に、穏やかな暮らしなどと贅沢は言わない——どんなに悲惨な境遇であれ、生きている自身の姿を、アクメリンは思い描けないのだった。

それにしても——と、アクメリンは疑問に思う。こんな地に何日も滞在して、ゼメキンスは何をしているのだろう。牢獄を借りて、私を拷問するというのなら、まだ分かる。それとも、前に言っていたように、厳しい拷問に耐えられるまで身体が回復するのを待っているのだろうか。けれど、こんな辺境の地よりも総本山のお膝元にこそ、恐ろしい拷問器具が揃っているのではないだろうか。と、それを考えると、暗黒へ果てしなく落ちていくような恐怖を感じる。

この地に長く留まるほどアクメリンの命は長らえるのだが、しかし、それだけ恐怖も募ってくる。

ゼメキンスの目論見をアクメリンが理解したのは、マライボの牢獄で迎えた五日目の朝だった。

アルイェットから拉致されて初めて、アク

メリンは一時間を超えて四肢を自由にされた。自身の手で麵包を千切って食べおのれの手で碗を持って肉汁を啜る自由を与えられた。再び浣腸を施されてゼメキンスたちの目前で排泄させられたが、水を与えられて我が手で洗うことは許された。かつてのアクメリンだったら、死にもまさる恥辱だったろうが、今はむしろ逆に、ずいぶんと人がましく扱われている思いだった。

火傷を覆っていた脂が修道僧の手で剥がされて、瘡蓋が安定して、血や漿液の浸出も無いと確認された。

「王女エクスターシャであれば、常に気品を忘れぬことだな」

ゼメキンスが大桶を叩きながら警告する。全裸で気品もあったものではないでしょうにとアクメリンは思うが、たぶん言葉遣いのことだろうとは見当がつく。

果たして。素裸のまま、拘束はされずに引き出された牢獄の外には、役人だけでなく、街の住人が老若男女を問わず百人ほども集まっていた。

見世物にされる中で、いかにもエクスターシャ王女らしく振る舞うように求められているのだと、アクメリンは悟った。

エクスターシャらしくですって？

アクメリンは心のなかで嘲笑った。幼な児を顧みず馬の骨と駆け落ちするような女の娘。彼女なら、こんな目に遭わされたら、身を処す術も知らず泣き喚くだろう。それとも母親譲りの破廉恥で、平然としているかもしれない。

では、私はどうすれば——それを考える暇も与えられず、見世物の飾り立てが始まった。

アルイェットからマライボまでの道中でアクメリンが磔けられていた十字架。それを背負って歩く形に、また縛り付けられた——のは、腕だけだった。股間に食い込んでいた縦木からの突出部は、斜め上向きのT字形に替えられていた。T字形の横木が腰を前へ押し出して、アクメリンに前傾姿勢を許さない。アクメリンは直立して、十字架を斜めに引きずって歩かされる仕掛けになっていた。

アクメリンは、牢獄を囲む石壁の崩れている場所へ追い立てられた。十字架の端を地に引きずる振動が背骨へ伝わって、それ自体は不愉快でもなかった。

「魔女の嫌疑は薄れたのじゃから、罪状はこれだけじゃな」

崩れて腰の高さほどになっている石壁の上

に、ゼメキンスが“Heretic”の木札を置いた。

アクメリンは跪かせられて、木札の上に乳房を載せた。十字架の横木をホナーとリカードが左右から押さえ込んで、アクメリンを身動きできなくする。ガイアスが乳房をつかみ木札をずらして、乳暈が木札の縁に触れるくらいにした。

太い釘を真上から乳首に突きつけられて、アクメリンが蒼褪めた。

「ま、まさか……」

ゼメキンスが金槌を振り上げるのを見て、まさかではないと知る。

「いやあっ、やめてくださいっ！」

絶叫を断ち割るようにゴツンと鈍い音が響き、アクメリンが凄絶な悲鳴を迸らせる。

「いゝきゝゃあゝあゝあゝあゝあゝっっ！！」

もしも二人の修道僧が身動きを封じていなければ、アクメリンはのけぞって、みずから乳首を引き千切っていただろう。

もう一方の乳首も釘で木札に縫いつけられて。額冠と首飾と指輪を裸身に飾られて。引き回しの晴れ姿が調った。

アクメリンは石壁の外へ引き立てられた。この街の衛兵ではなく、枢機卿の護衛兵が追立て役に抜擢されて、槍を持った徒士がふた

り、アクメリンの斜め後ろに付いた。真後ろには、モサッド隊長が長い鞭を持って騎馬。その後ろには枢機卿を先頭に修道僧三人も騎馬で菱形に並ぶ。あとは、行列を物々しくするために十人ばかりの徒士が二列縦隊。

「縦隊、前へえええ」

モサッドの掛ける予令に合わせて、二本の槍の穂先がアクメリンの尻に軽く触れる。

「進めッ！」

ちくり——ではなく、爪ほどの深さではあったが、ずぶりと尻を刺されて、アクメリンは前へ歩かされた。

「あう……」

木札が揺れて、どうにか折り合いをつけていた乳首の激痛が暴れる。しかし、すこしでも足を止めると。

びしいっ！

モサッドの鞭が容赦なく背中に叩きつけられる。その衝撃で、さらに乳首の激痛が揺れる。

「くっ……」

アクメリンは歩み続けるしかない。

アクメリンの前に開けた道の両側には、野次馬が壁のように並んでいる。そのあまりの多さに、麻痺していた羞恥が甦った。

(あああ……こんなにも多くの人たちに……)

しかし。恥を晒したところで、今さらどうなるわけでもないと思い直す。嫁入り前の娘が……貴族ともあろう者が……そういった、かつては致命傷になりかねない風評は、二重の意味で今のアクメリンには無縁だった。

下腹部の烙印が、女としての未来の一切を奪い去った。そして、民衆の前に恥辱を曝しているのはフィッシュク準王国の第二王女であって、アクメリンではない。

ならば。王女として毅然と、あるいは淫乱な女の娘として平然と——そのように振る舞っても、私の名誉は傷付かない。そんなふうにおのれを励ますと。乳首の激痛さえも軽くなって、背筋を伸ばして歩けるようになった。

引き回される最終地は、通常ならば処刑の場であるが。アクメリンのそれはデチカンだ。ならばこの街では、引き回された末に何をされるのか。ゼメキンスのことだ。街を一周して終わりなどという生ぬるいことはしないだろう。この後に何をされるのか。耐え難い苦痛か、いっそうの羞恥か。おそらく、その両方だろう。アクメリンは戦慄しながらも、怖いもの見たさとはすこし違うのだが——あれこれと想像してしまう。

そして。この大勢の人たちも、そんな私の苦悶を嗤いながら見物するのだ。それを思うと、頭に霞がかかる。どうせ、一切の未来を奪われて、処刑場に果てる命。それまでの間、せいぜい私で愉しむがいい。そんな捨て鉢な気分にもなってくる。

ふつうに歩く半分にも足りない歩みでも、ついには街を囲む城壁に行き当たる。右の尻を槍に刺されて、アクメリンは左へ進んだ。

遅々としてすすまぬ引き回しの行列だが、それでも昼までには街を城壁に沿って一周して、そこからは街の中心にある広場へ向かった。そこは、戦であれば出陣と凱旋を行ない、平時には処刑を含むさまざまな催し物が開かれる場だった。

そこにも野次馬が蝟集していた。だけではなく、いろいろな屋台まで出ている。先にも述べたが、この街で公開処刑される罪人は月に数人程度。死刑は別としても、むくつけき男が裸に剥かれて鞭打たれようと、年増女が鳥籠に閉じ込めて晒されようと、わざわざ見物に出向く者はそんなに多くない。しかし、うら若い娘が素裸で磔に掛けられるとなると――実に三年ぶりの出来事だった。

だから屋台の数も多い。荷馬車に天板を置

いただけの即席屋台まで散見された。

アクメリンを磔けた十字架は、腰を押し出していたT字形の棒が抜き取られ、アクメリンの胴と腰に縄を足されてから、垂直に立てられた。股間に食い込む楔は付け足されなかった。逆に――両足首に縄が巻かれて左右に引かれ、地面に打ち込まれた杭に結び付けられた。十字架は処刑台の上に立てられたから、群衆は、ぱっくり開かれた淫裂を下から見上げる形になる。しかし、皆が間近に覗き込めるわけではない。処刑台から八歩の距離を隔てて、簡易な柵が張り巡らされた。アクメリンの正面に入口が設けられ、二人の修道僧が門番よろしく内側に立った。真後ろに設けられた出口には、外側に兵士が立って入場を阻んでいる。

見物人たちも心得たもので。修道僧の足元に置かれた喜捨箱に数枚の硬貨を落とし、いちおうは信心深く胸に聖印を切ってから、かぶりつきに歩み寄る。

御開帳を覗き込んで、それで満足する者は少ない。数歩を下がってから、アクメリン目がけてさまざまな汚物を投げつける。腐った野菜や卵、わざわざ泥と灰を練った団子。家から持ち来たった品もあるが、屋台でも売っ

ている。塵芥が金になるのだから、これこそ錬金術であろう——などという半畳は、ともかく。

当たって怪我をさせるような物は、入り口で検閲されている。だから、たいして痛くはない——木札に命中しなければ。アクメリンは目と口を閉じていれば、肉体的な実害はほとんどなかった。どころか、股間を直撃されれば、なにやら妖しい感覚さえも起こってくる。

この人たちはエクスターシャ王女を蔑んで、このような辱めを与えているのだ。そう思えば、あまり悔しくもない。むしろ王女を取り囲む群衆の中に混じって、異教徒の奴隷に成り下がりに嫁くエクスターシャを罰しているような気分さえなってくる。そんな想いは、股間に投げつけられる汚物の感触と共に、アクメリンを歪んだ官能にさえ導くのだった。もっとも、木札が揺れるたびに、ささやかな官能など消し飛ぶのだが。

アクメリンの全身が汚物まみれになると、離れて立っているガイアスが投擲をやめさせる。控えの兵士が処刑台に上がり、何杯も水をぶっ掛けて『的』を綺麗にする。

修道僧や兵士たちは広場での『見世物興業』

を始める前に軽食を摂っていたが、アクメリンは食事を与えられていない。それでも、ぶっ掛けられる水を口に入れて渴きを癒せば——飢えなど感じていられる状況ではなかった。興業は夕暮まで続いた。

枢機卿猊下による処刑直前の赦免という体裁を取って、アクメリンは十字架から下ろされ、荷車に転がされ布を被せられて牢獄へ逆戻り。今日はじゅうぶんに手足を伸ばしたであろうという名目で逆海老に拘束された。乳首に明いた穴には、薬草を搗り潰した泥と例の秘薬とが練り混ぜられた軟膏を詰め込まれて油紙で包まれた。この処置を何度か繰り返され、火傷がかなり治ってからは淫核にも同様の仕打がなされて、ついには三つの突起に半永久的な穴が穿たれるのだが、それは『拷虐の四』で語られるであろう。

——翌日は、また半日ごとに異なる姿勢で牢獄に放置された。

そして、マライボでの七日目に、ふたたび『見世物興業』が催された。

前回よりも人出が多かった。というのも、ゼメキンスの出した布令が近隣の小都市にも達して、わざわざ駆けつけた者も百や二百ではなかったからだ。彼らの多くは金と暇を持

て余している階層であったから、ますます屋台も興業主もあぶく銭を搔き入れたわけである。

アクメリンは、前よりは余裕を持って主人公役を務めきった。乳首にはすでに穴が開いているから、そこに釘を通してても新たな激痛が生じはしない。むしろ。治り始めていた傷口を刺激されて、痛いのと同時に（なにぶん敏感な部位であるから）妖しい感覚までがさざ波のように押し寄せて――処刑場で汚物を投げつけられる以前に、淫裂にかすかなぬめりが生じていた。痛みの中に快感を見い出す、悦虐の萌芽だったかもしれない。

痛みが薄れただけ意識はしっかりと保たれて。この日は柵の向こうに群れている群衆の姿も鮮明に見て取れた。柵の中へ入ってくる者たちと比べると、貧しい身なりの者が多い。わずか数枚の銅貨（とはいえ、一日分の麴麴を贖える――とまでは、アクメリンは知らない）が喜捨できない人々だ。あるいは、教会が求めている以上に清廉な人々か。

そんなだから、その男はアクメリンの目にも印象的に映じた。東方から訪れた商人でもあろうか。これみよがしに十字架を胸に掛けてはいるが、異国風の服装に浅黒い肌と豊か

な頬髯。それ以上に、肩に鳩を止まらせているのが異様だった。籠の中で鳥を飼う富裕者は珍しくもないが、外出にも連れて歩くなど、よほど鳩を可愛がり鳩も飼主に懐いているのか。

淫虐の渦中に翻弄されながら、ふっと心和む一瞬ではあった。

アクメリンには鳩ほどの待遇も与えられない。一昨日と同様、夕刻には牢獄へ連れ戻されて、その夜は久しぶりに（？）狭い檻に押し込められて一夜を過ごしたのだった。